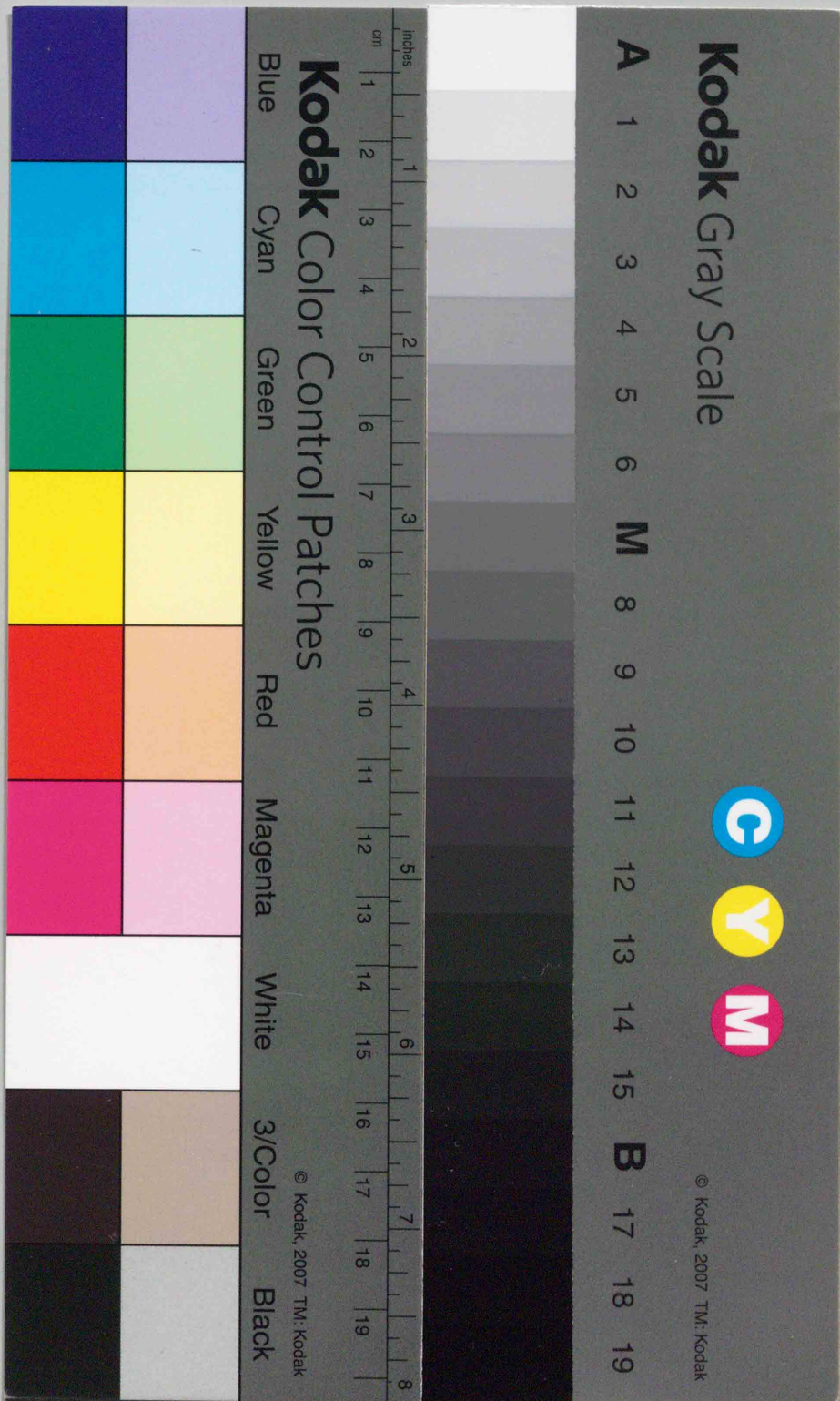


訂改
帝國新讀本
卷五

375.9

Ha7

資料室



41673

教科書文庫

4
810
41-1927
200030
1524



© Kodak, 2007 TM: Kodak

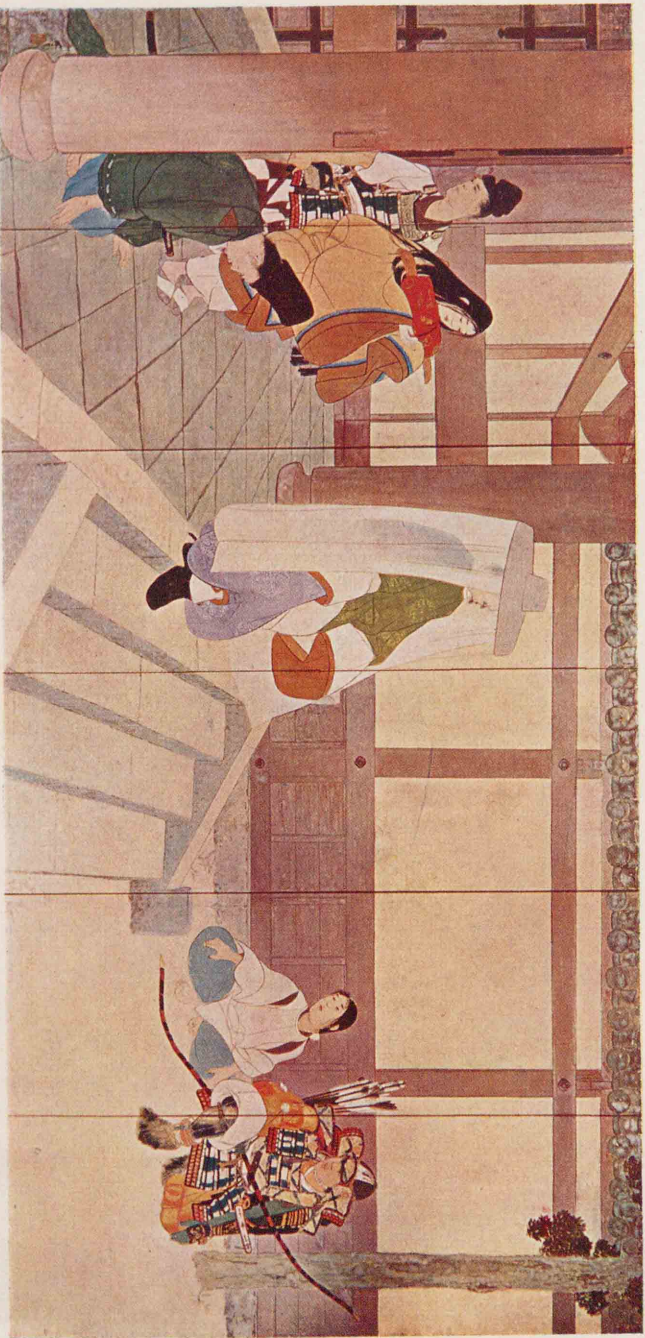
資料室 375.9
H27

資料室

文學博士芳賀矢一編

改訂 帝國新讀本

東京 合資會社 富山房發兌



宮行の野吉七

皇天朝醒後 筆雪関本橋



訂改 帝國新讀本 卷五目次

一	こち吹く風(短歌).....	一
二	京都御所拜觀の記.....	三
三	光堂.....	泉鏡花.....八
四	若さ.....	高村光太郎.....二四
	田舎の自然(自修文).....	吉村冬彦.....一八
五	頼朝と義經.....	(義經記).....二〇
六	やはらぎの心.....	生田春月.....二四
七	吉野の行宮.....	北畠親房.....三〇
八	新緑の頃.....	近松秋江.....三五
九	五月の太陽.....	萬造寺齊.....四三

一〇 學者の事業……………佐々醒雪…五

ことばの話(自修文)……………吉田兼好…五

二 仁和寺の法師……………石清水…五

一 石清水……………かなへ…五

二 かなへ……………長塚節…六

三 土の匂……………(會我物語)…六

三 箱王仇に遇ふ……………森鷗外…七

四 陣屋問答その一……………森鷗外…七

五 陣屋問答その二……………田山花袋…八

六 伊勢志摩の海……………清 水(短歌)…九

七 清 水(短歌)……………芥川龍之介…二

八 蘇州城内……………西瓜と蠅…七

九 西瓜と蠅……………

蟻と地上(自修文)

二〇 「日本だ」……………井上康文…九

二一 銀砂満天……………島崎藤村…一〇

二二 戸隠登山……………河井醉茗…一〇

二三 海洋の旅……………萩原井泉水…二

をみなへし(自修文)……………永井荷風…三

二四 テニスの試合……………生田春月…二九

二五 みやびの物語……………尾崎喜八…三四

一 秋の青柳……………橘 成 季…四〇

二 王子猷……………(唐 物 語)…四〇

三 三船の才……………(大 鏡)…四三

六 水の音……………相馬御風…四五

七 實體實相……………松 浦 一…四六

六 狐塚……………(狂言)……………二五

元 日蓮上人……………高山林次郎……………二五

霧の身延山(自修文)……………田山花袋……………二六

三 舊都の月……………(源平盛衰記)……………二七

改訂帝國新讀本 卷五

一 ちち吹く風

(一) 加藤千蔭

二見瀉 ちち吹く風に明けそめて
かみよのまゝの春は來にけり

(二) 凡河内躬恒

はるの夜のみはあやなし梅の花
色こそ見えね香やはかくるゝ

(三) 素性法師

見わたせば柳さくらをこきまぜて

一 ちち吹く風

(一) 姓は橘。國學者、歌人。江戸淵の門人。賀茂真化五年(二四七六)歿、四十七年。

(二) 平安時代の歌人。宇多醍醐朝の頃の人。

あやなし

(三) 歌僧。俗稱良峰玄利。清和天皇に仕へた。

(一) 歌人。尾張の人。明治二十三年歿。

花見ついでに浅し分
れは雲のおく
ら思ひし山
よしの沖
契

みやこぞ春の錦なりける
をち方の一むら霞ほのぼのと
松になりゆく朝ぼらけかな

間島冬道^(一)



蹟筆 沖契

霞とも雨とも空はわかぬ間に

契^(二) 沖

たまぬきをむる青柳のいと

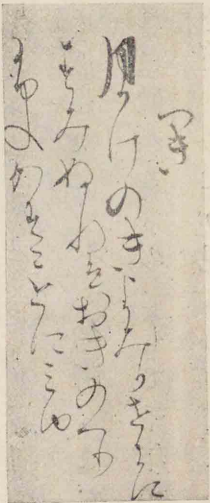
藤原俊成

駒とめてなほ水かはん山ぶきの

はなの露そふ井手のたま川

(二) 國學者。元祿十四年(二三六十二年)歿。

つき
月かけのき
よみかせき
にすみぬれ
はおきのつ
りふねかす
ことに見ゆ



蹟筆 成俊 藤原

よみ人しらす
をしめども
春の限りの
けふの日の

夕ぐれにさへなりにつけるかな

二 京都御所拜觀の記

京都御所を拜觀したる時ほど、神々しかりしことなし。我が拜觀したるは四月半ば頃なりしが、殿掌なる人に導かれて、かしここ廻るに麗かなる都の春は、たゞこの九重の中に籠れるが如く、踏む足も空にて、人間の世界を出でたるやうなり。

私に承るに、皇居は初よりここにありしに、あらず。平安時代の末よりをりをりの里内裏となり、今より五百餘年前よりここに定ま

神々し

殿掌

踏む足も空

里内裏

(一)第百十九代光格天皇の天明八年(二十四年)

(二)孝明天皇の御代。元年は紀元二五十四年。

りしなり。百三十餘年前(一)天明の大火後、幕府勅命を受け、老中松平定信に命じて、新たに造營の工を起す。從來略式にのみなり行きし皇居も、この時より儼然として舊制に復したり。然るに安政元年また大火に遭ひ、更に造營の工事あり、概ね定信が定めし式に従はしめられたる、即ち今の御所ぞかし。

紫宸殿、清涼殿等は定信が深く故實をたゞし、平安時代の舊制に復せしものなり。今の御所もまたこれに倣へるものにして、千年の昔を目のあたり見る心地す。



子障、聖賢

紫宸殿

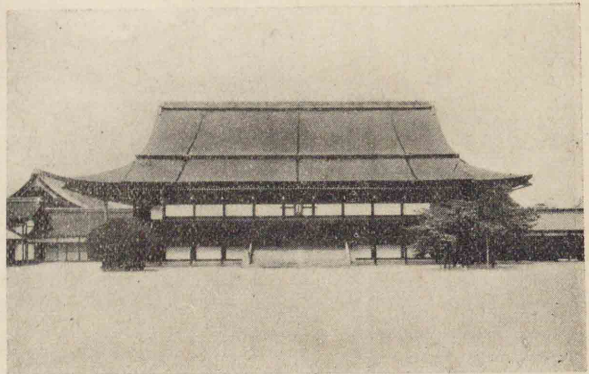
故實をたゞす

節會

賢聖障子

(一)有名な畫家。清和、陽成、光孝、宇多、醍醐の五朝に歴仕して、官大納言に至つた。

御帳臺



殿 宸 紫

紫宸殿は皇居の正殿にして南面し、その前に南庭あり。階前の左下に左近櫻、右近橘の二本の樹ある外は塵も留めず。今は春の日の、一面に敷詰めたる砂を射て、眩きばかりなるが、元日の節會に、ほのぼのと明離れたる初日の光など、いかにめでたからんと覺ゆ。

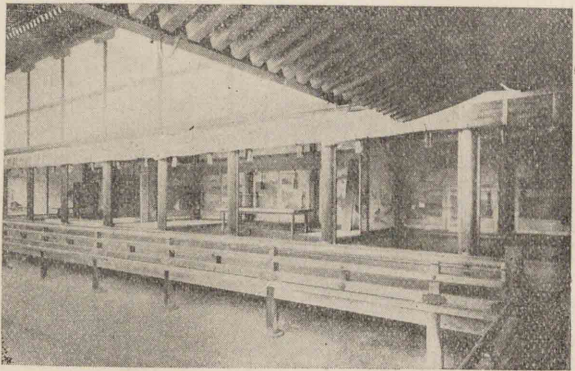
殿は廣き一面の板敷にして、中に唐代の賢臣を描ける襖あり。所謂賢聖障子にして、昔は巨勢金岡の筆になれるものなりきといふ。明治天皇も、大正天皇も、ここに御即位の式を挙げ給ひしなり。大正四年の大典には、余も參列者の一人たる光榮を擔ひしが、この日、紫宸殿上には天皇陛下の高御座と、皇后陛下の御帳臺とを据ゑ、階下

威儀の人

近く立てたる日光月光の大旛を始めとして、紅、黃、綠、紫、幾十の大旛、小旛の風に翻れるも麗しく、威儀の人の黒袍、紅袍、鉦鼓の人の綠袍

にて居並びたるも嚴しかりき。廻廊には大禮服の文武官、燕尾服の衆議院議員、外國使臣も交りて、その對照誠におもしろく、古今東西の文化を集めたる盛觀とぞ覺えし。

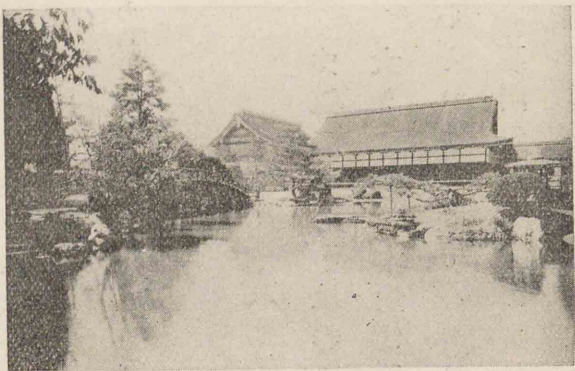
世移り風變る
母屋
塗籠



清涼殿

御寢室なり。左右の別室には、殿上といひて、殿上人の宿直する所な

林泉の巧
賀茂川の一名



小御所

どあり。前の廣庇に立てたる衝立に、年中行事障子、昆明池障子あり。昆明池障子に近く、荒海障子あり。また殿上の外の渡廊に馬形障子あり。上古のは金岡の筆にして、夜々脱けいでて萩の戸の萩を食ひしかば、勅ありて、轡を描き加へしめられたりと傳ふるはこれなり。清涼殿は東面にして、階前左右に河竹、吳竹を植ゑ、御溝の水その側を流る。

その他には小御所、御學問所、常御殿等あり。いづれも近世の様式なり。小御所、御學問所は謁見など仰せつけらるゝ所をりにより、拜謁者の階級によりて、ここかしこの別あり。常御殿は即ち御居間と申す。その東の御庭、林泉の巧いふばかりなし。蟬の小川

(一)比叡山の一支峰

を堰入れて池をたゝへ、池邊には花木を植ゑて、四季の眺絶えず、東山一帶また一眸の中に入る。殊に彼方の木立少し切下げたるは、如意嶽の大文字の火を望み給はんが爲とぞ。
一わたり拜觀したるばかりにて、よくは覺えず。九重の雲深き御あたりのことを書出づるも畏しや。

三 光 堂

泉 鏡 花

山道二町許、中尊寺はもう近い。

大きな廣い本堂に、見上げるやうな釋尊の外、寂莫として何も無い。それが莊嚴であつた。日の光が幽かに漏れた。

裏門の方へ出ようとする傍に寺の厨があつて、そこで巡覽券を出すのを、車夫が取次いでくれる。巡覽すべきは、初め藥師堂、次に寶物庫、さて金色堂所謂光堂、續いて經藏、辨財天といふ順序である。皆

(二)岩手縣西磐井郡平泉村。嘉祥三年(一〇〇〇年)慈覺大師の開基したものと云ふ。

厨

參詣の人を待つて、始めて扉を開く。すぐまたあとを鎖すのである。寶物庫には番人がゐて、經藏には年紀の少い出家が、火の氣もなしに、一人經机に向かつてゐた。

初め藥師堂に詣でて、それから寶物庫を一巡すると、ここの番人のお小僧が鍵を手にして、一條道を隔てた丘の上に導く。階の前に八重櫻が枝もたわゝに咲きつゝ、且つ芝生に散つて敷いたやうであつた。

櫻は中尊寺の門内にも咲いてゐた。麓から上らうとする坂の下の取附の所にも、一本見事なのがあつて、山中心得の條々を記した禁札と一緒に、たしか「淺葱櫻」といふ札が



中尊寺全景

建つてゐた。けれどもそれのみには限らない。ところどころ汽車の窓から見た櫻は、奥が暗くなるに随つて、はつとさえを見せて咲いたのはなかつた。薄墨、鬱金、また淺葱といったやうな、どの櫻も皆ぼつとりとして曇つて、暗い紫を帯びてゐた。雲が黒かつた爲かも知れない。

と、階の前の花片が、をりからの冷たい風にはらはらと誘はれてさつと散つて、この光堂の中を空ざまにひらりと紫に舞ふかと思ふと、羽目に浮彫した孔雀の尾に、玉を刻んで緑青にさびたのが、なほ嚴かに美しい。その翼をはらはらと叩いて、ちらちらと床にこぼれかゝる。やがて宙で黄金の卷柱の光を受けて、はつと金色に翻るのを見た時は、思はず驚歎の瞳を見はつた。

床も、なげしも、柱はもとより、佇む所、踏む所は、黒漆の落ちた黄金である。黄金の剥げた黒漆とは思はれないで、しかも些のけばけば

空さま

浮彫

仙骨

七寶莊嚴

種々相

須彌壇

しい感じが起らぬ。さながら金粉の薄雲の中に立つた趣がある。我等仙骨をもたない身も、この雲は且つ踏んでも破れぬ。その雲を透かして、四方に七寶莊嚴の卷柱に對するのである。美しい虹をそのまゝ柱にして描いた十二光佛の微妙な種々相は、一つ一つ錦の絲に白露を鏤めた如く、玲瓏として珠玉の中に顯れて、清く明らかに、しかも幽かな幻である。その十二光佛の周圍には、玉螺鈿を星の流れるが如く輝かして、寶相華、勝曼華が隙間もなく咲きめぐつてゐる。

この柱が須彌壇の四隅にある。誠に天上の柱である。須彌壇は三座あつて、壇上には彌陀、觀音、勢至の三尊、二天、六地藏が安置され、壇の中には真中に清衡、左に基衡、右に秀衡の棺が納り、ここに各一口の劍を抱き、鎮守府將軍の印を帯び、錦袍に包まれた三つの屍が、ただそのまゝに横たはつてゐるさうである。

天界一叢の雲

雖芥子の紅は美人の屍より咲いたと聞く。光堂はここに三個の英雄が結んだ金色の果なのである。

謹んで辭して、天界一叢の雲を下りた。

階を下りざまに見返ると、外圍の天井裏に蜘蛛の巣がかゝつて、風に軽く吹かれながら、きらきらと輝くのを、不思議な塵よと見れば、一粒の金粉の落ちて輝くのであつた。

さて經藏を見よ。またいやが上に懐かしい。

羽目には天女、迦陵頻迦が髣髴として舞ひつゝ、奏でつゝ、浮出てる。影を受けた束貫の材は、鈴と草の花との玉の螺鈿である。

漆塗金の八角の臺座には、本尊文殊師利、朱の獅子に騎しておはします。獅子の眼は爛々として、赫と眞赤な口をあけた、青い毛の部厚な横顔が見られるが、づつと足を舉げさうな構である。右にこの轡を取つて、ちよつと振向いて、菩薩にものをいひさうなのが優

爛々

(一)鳥の名。

拂子
錫杖

瀧の音さく
ら月夜は更
けにけり
鏡花

紺紙金泥

(一)平泉村。醫王
山金剛王院と
いひ、嘉祥年
中慈覺大師の
開基したものと
傳へる。

闕王、左に一匣を捧げたのは善哉童子、この両側左右の背後に、淨名居士と佛陀波利とが、一は拂子を振り、一は錫杖に一軸を結んだのを肩に擔ぐやうに杖ついて立つ。髭も、額も、目も、眉も、そのいづれも莞爾莞爾として、文殊も微笑んでまします。第一獅子が笑ふのである。獅子が。



泉鏡花筆蹟

この須彌壇を左に一架を高く設けて、ここに紺紙金泥の一卷を半ば開いて捧げてある。見返しは金泥、銀泥で、本經の圖解を描く。清麗巧緻で、且つ神秘である。

今ここに來てこの經を見ると、毛越寺の彼は恰も砂金を捧げることが如く、これは月光を仰ぐやうであつた。

散佚

架の裏に色の青白い瘦せた墨染の若い出家が一人ゐた。私の一禮に答へて、「お緩り御覽なさい。」

二三の散佚はあらうが、いふまでもなく、堂の内壁にめぐらした八つの棚に満ちて、二代基衡のこの一切經、一代清衡の金銀泥一行まぜ書の一切經、並びに判官びいきの第一人者三代秀衡老雄の奉納した黄紙宋板の一切經が、皆黒耀の珠玉の如く漆の架に満ちてゐる。一切經の全部量は、七駄片馬と稱へるのである。

「拜見をいたしました。」

「はい。」と腰衣の素足で立つて、すつと經堂を出て、朴齒の高足駄で、卷袖で、寒くほつそりと草を行く。清らかな僧であつた。

四 若 さ

高村光太郎

若いのはいい。何かが知りたくて知りたくて、また遊びたくて遊

びたくて、疲れるといふことが疲勞でなくて休息であるほど、若いのはいい。若い人を見てゐると、自然と心が腕を伸して來て、しまひに思はずほゝ笑まされる。若い人のみづみづしさは、いろいろな意味でこの世を救ふ。

無自覺

だが恐らく、若さの美德を若い人に説くほど、變なものはあるまい。若さの眞中にゐる時若さの價を聽かされるほど、をかしたものはあるまい。餘りあたりまへ過ぎることを聞く氣がして、何の不思議も感ずまい。あゝ、かういふ無自覺はほんたうに貴い。力強い。

若さの美德を痛感するのは、若い人のことではない。やがてひとりでそれを感ずる時代がくるのだ。若さのよいのは、若さをもつ時ばかりでなく、若さをしのぶ時でさへよいのである。若さを自知せぬ若い人よ、君たちの體力の續く限り、精神力の續く限り、自分の内からの疚しくない慾望の聲に忠實であるがいい。何が疚しいか

道德律

疚しくないかに外からの標準はない。自然は人間の心に自らそれを感じさせる仕掛を作つて置いた。一番よく自分の内の聲を聴くものが、一番正しい生活に入ることになる。人間世界の道德律は、さうやつて自然にできたものだと思ふ。若い人が「淨さ」に敏感であるのは、人間本能のいかに信賴すべきかを説明してゐるのだ。若い人よ。君たちのその敏感さを守るがいい。力をつくして清淨に進むがいい。この世は清淨ばかりの世ではない。寧ろその反對のものが充滿してゐるにはあるが、しかも常に清淨であることを望んでゐるのだ。それが自然の植ゑた本能である。自分の淨さを守ると同時に、人の淨さをも守るがいい。汚れたものは恕せ、自分の過を知つたら、心から自然にあやまるがいい。そしてあとは忘れるがいい。若い人よ。みづみづしい氣力に満ちた人よ。君たちは心おきなく勉強するがいい。遊ぶがいい。君たちが必ず自然から君獨得の特質を與へら

Abraham Lincoln
米國第十六代
大統領
西曆一八六五年



リンカン

れてゐることを信ずるがいい。君が君の良心に従へば、この世ではきつと戦はねばならぬことに出會ふだらう。その時、君の後楯に自然がついてゐることを思ひ出すがいい。勝敗は君が自分の内の聲に聽いたか聽かぬかにある。相手を倒したか倒さぬかにはない。立身出世教や成功熱は、人間の本能である。進展意志を悪用したわなである。これに引つか、ると、魂を傷つけられる。立身出世の代表者のやうにされてゐるあのリンカンの美しい心事を考へて見ても、いかに立身出世教の耻づかしいものであるかがわかる。立身出世したリンカンは、決してそんな教を奉じたのではない。

若い人よ、十分に腕を伸して、太陽を浴びて歩き給へ。悩む時には悩まねばならぬ。悩んでなほ、且つ明朗でゐられる永遠に若い魂と

なるには、若い時の精神的鍛錬が肝要である。

田舎の自然〔自修文〕

吉村冬彦

田舎の自然は確かに美しい。空の色でも、木の葉の色でも、都會で見るとはまるで違つてゐる。さういふ美しさも、慣れると美しさを感じなくなるだらうといふ人もあるが、さうとは限らない。自然の美の奥行は、さう見すかされ易いものではない。永く見てゐればゐるほど、いくらでも新しい美しさを發見することができざるはずのものである。できなければ、それは眼が弱いからであらう。一年、二年で見飽きるやうなものであつたら、自然に關する藝術や科學は、數千年前に完結してしまつてゐるはずである。

六つになる親類の子供が、去年の暮から東京に來てゐる。それに「東京とお國とどつちがいいか。」と聞いて見たら、「お國の方がいい。」といつた。「どうしてか。」と聞くと、「お國の川には蝦がゐるから。」と答へた。

この子供の蝦といつたのは、必ずしも動物學上の蝦のことではない。蝦のゐ

科學
經驗から獲た
知識を組織立
てて一定の理
法に到達せし
める學術

る清冽な小川の流、それに翠の影をひたす森や山、河畔に咲亂れる千草の花、さういふやうなもの全體を引きくるめた田舎の自然を象徴する蝦でなければならぬ。東京で魚屋から川蝦を買つて來てこの子供にやつて見れば、このことは容易に證明されるであらう。私自身もこの蝦のことを考へると、田舎がこひしくなる。しかし、それは現在の田舎ではなくて、過去の思出の中にある田舎である。蝦は今でもゐるが、「子供の私」は、もうそこにはゐないからである。しかし、この「子供の私」は、今でも「大人の私」の中どこかに隠れてゐる。そして意外な時に出て、外界をのぞくことがある。例へば、郊外を歩いてゐて、路端の名もない草の花を見る時や、或は遠くの松の木の梢の神秘的な色彩を見てゐる時などに、僅かの瞬間だけではあるが、この蝦の幻影を認めることができる。それが消えたあとに残るものは、淡い「時の悲み」である。

自然くらの人間に深切なものはない。そしてその深切さは、田舎の人の深切さとは全く種類の違つたものである。都會にはこの自然が缺乏してゐて、その代りに田舎の「人」が入りこんでゐるのである。

(一)吉村冬彦の隨筆集。大正十二年岩波書店發行

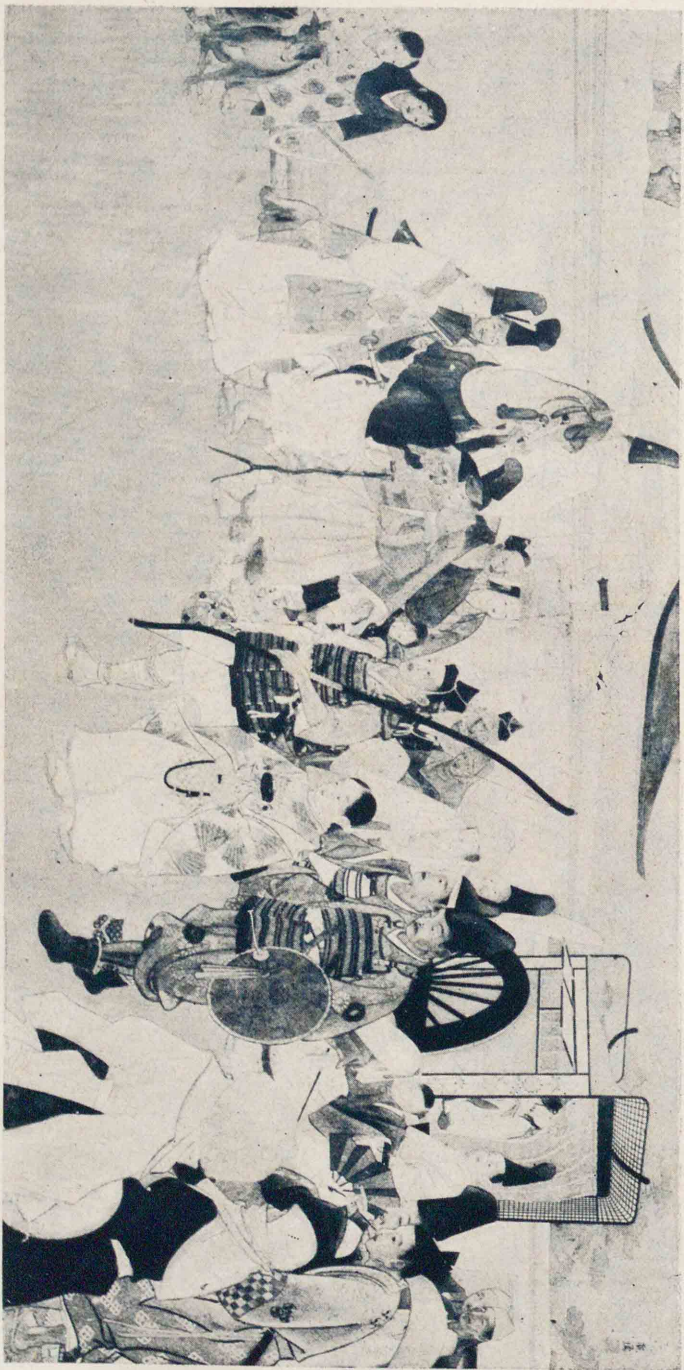
—冬彦集—

五 頼朝と義經

(一) 九郎御曹司浮島が原に着き給ひ、兵衛佐殿の陣の前、三町許引退いて陣を取り、暫く息をぞ休められける。佐殿これを御覽じて、「ここに白旗、白じるしにて、清げなる武者五六十騎許見えたるは、誰なるらんおぼつかなし。假名、實名をたづねて参れ。」とて、堀、彌太郎を御使にて遣さる。家子、郎等數多引具して参る。間を隔てて、彌太郎一騎進み出で申しけるは、「ここに白じるしにておはしまし候ふは、誰人にてわたらせ給ひて候ふぞ。假名、實名をたしかに承り候へと、鎌倉殿の仰にて候。」と申しければ、その中に二十四五許なる男の、色白く尋常なるが、赤地の錦の直垂に、紫裾濃の鎧の裾金物うちたるを着、白星の五枚兜に、鍬形打ちて猪頸に着、大中黒の矢負ひ、重籐の弓持ちて、黒き馬の太く逞しきに乗りたるが、歩ませ出でて申されけるは、

(一) 源義經。
 (二) 駿河國(静岡縣)駿東郡。愛鷹山の裾なる須戸沼附近の原野。
 (三) 右兵衛權佐。源頼朝。

假名
 實名



兼 風 觀 野 栗

虎 放

見參

(一)名は繼信
色代

(二)父左馬頭源義
朝

鎌倉殿も知らしめされて候。童名は牛若と申し候ひしが、近年奥州に下向仕り候うて居候ひつるが、御謀叛の由承り、夜を日につぎて馳參じて候。見參にいらてたび候へ。」と仰せられければ、堀彌太郎、さては御兄弟にてましましけり。」と、馬よりとんでおり、御曹司の乳母子佐藤三郎を呼出して、色代あり、彌太郎一町許馬をひかせけり。かくて佐殿の御前に參り、この由申し上げければ、佐殿は善惡に騒がぬ人にておはしけるが、このたびは殊の外嬉しげにて、さらばこれへおはしました候へ。見參せん。」と宣へば、彌太郎やがて參り、御曹司にこの由を申す。御曹司大きに悦び、急ぎ參り給ふ。佐殿つくづくとこれを御覽じて、まづ涙に咽せび給へば、御曹司も共に聲を吞みて泣き給ふ。

互に心ゆくほど泣きて後、佐殿涙をおさへて、^(三)さても頭の殿に後れ奉りて、その後御行方を承り候はず。幼少におはし候ふ時、見奉り

(一)平清盛の繼母。
(二)蛭ヶ小島。
(三)伊東入道祐親。
(四)北條四郎時政。

しばかりなり。頼朝、池の尼の宥められしによりて、伊豆の配所にて
伊東、北條に守護せられ、心にまかせぬ身にて候ひしほどに、奥州へ
御下向の由は微かに承りて候ひしかども、音信だにも申さず候。兄
弟ありとは御忘れ候はで、取敢へず御上り候ふこと、申しつくし難
く、悦び入り候。これ御覽候へ、かゝる大事をこそ思ひ企てて候へ。八
個國の人々を始めとして候へども、皆他人なれば、身の一大事を申
しあはする人もなし。平家の討手上せばやと思へども、身は一人な
り。頼朝自身進み候へば、東國おぼつかなし。代官を上せんとすれば、
心安き兄弟もなし。他人を上せんとすれば、平家と一つになりて、却
つて東國をや攻めんと存ずる間、それもかなひ難かりしに、今御邊
を待ちつけて候へば、故左馬頭殿の蘇らせ給ひたるやうにこそ思
ひ候へ。我等が祖先八幡殿の後三年の合戦に、舍弟刑部丞と一つに
なりて、遂に奥州を従へ給ひける時の御心も、頼朝がたゞ今の心に

(五)源義家。
(六)源義光。

魚と水との如

とかくの返事
もなく

形の如く



(筆達榮山小) 王那沙

いかでかまさるべき。けふより後は魚と水との如くにして、先祖の
耻をすゝぎ、亡魂の憤を息めん。と宣ひもあへず、涙を流し給ひけり。
御曹司はとかくの返事もなくして、袂
をぞ絞られける。これを見て大名、小名、
互の御心推量りて、皆袖をぞ濡しける。
暫くありて御曹司申されけるは、仰
の如く、幼少の時御目にかゝりて候ひ
けるやらん、配所へ御下りの後は義經
も山科に候ひしが、七歳の時鞍馬へ参
りて、十六まで形の如く學問を仕り、さ
ては京都に候ひしが、内々平家方便をつくる由承り候ふ間、奥州に
下向仕りて、秀衡を頼み候ひつるが、御旗揚の由承りて、取敢へず馳
参る。今は君を見奉り候へば、故頭殿の御見参に入り候ふ心地して

こそ候へ。身をば君に進らする上は、いかが仰に従ひ参らせでは候ふべき。」と申しもあへず、また涙を流し給ひけるこそ哀なれ。さてこそこの御曹司を大將軍にて上せ給ひけれ。

— 義經記 —

六 やはらぎの心

生田 春月

廣い廣い果しもない大海の中を、一つの木片きざれが漂うてゐる。木片は潮に揉まれ波にた、かれながら、果しもない大海を、どこといふあてもなく、何の爲といふこともなく、恰も誰かに命ぜられたやうに、たゞ一つ寂しく漂うて行く。ちやうどその時、この大海の他の一端にも同じやうな一つの木片が、同じやうに漂うてゐる、どこといふあてもなく、何の爲といふことも知らないで。そして或時、或瞬間に、この二つの流木が、偶然、ほんの偶然にはつたりと出會ふ。それは運命といつてもいい。また天の攝理といつてもいい。ほんの何かの

攝理

拍子で果しもない大海の中で、二つの木片と木片とはひよいとぶつつかる……と思ふと、すぐまた離れてしまつて、もとのやうに、またてんでに違つた方向へと漂うて行く。

これがこの世に生きてゐる私たちの姿ではなからうか。人間同士も、この二つの浮木のやうなものではないであらうか。

思へば寂しい人間の姿である。孤獨な人生の道である。けれども、その孤獨な人生の道にも、同じ人間仲間が、偶、たとひほんの一瞬間でもふと行會うて、心と心との相觸れる微妙な悦を感じ合ふことができるのだと思へば、そこに無量な慰めが湧いて來はしないか。同じ世に生まれ合つたといふことも深い因縁である。それが偶、地上の一角に落合つて、親しく顔を見合ひ話し合ふといふだけでも、深く考へれば有難い事實である。何でもなく思へば、これくらゐ何でも無い當然なことではない。數の知れないほど澤山ゐる人間が、

因縁

どうして出會はないでゐられよう。互に交渉を持合はないでゐられよう。それは當然なことではないか。さういふ人も多からう。しかし、その何十億か、何百億か、測り知られないほどの澤山な人の中で、偶然同じ時代に生まれ合ひ、同じ國の同じ土地に生まれ合ひ、しかも、その上親しく話し合ふことのできる人は、抑、どれほどあらう。世界中の人の數に比べて見れば、それはほんのいふに足らぬ數に違ひない。それが更に知人となり、友となり、親となり、子となり、夫婦となることを思へば、千中の百、百中の十、十中の一、目に見えぬ不思議な手によつて選り出され、引合はされ、結び付けられること、の不可思議に、驚を覺えないでゐられようか。これが奇蹟でなくて何であらう。大海の眞中で二つの流木が偶、行きあたるのと、それは全く同じことではないだらうか。どんなに人間が澤山あつても、大抵は一生何の縁故もなく、濟んでしまふのだ。そんな人があるとも知らず

に過ぎてしまふのだ。その中で、偶、縁あつて何かの交渉をもつことになるといふのは、そこに深い因縁があつてのことではなければならぬ。それはもはや無心に自分を運んで行く波浪ではなくて、やはり自分と同じ流木でなければならぬ。

「袖ふりあふも他生の縁」といふ諺があるが、その言葉の中には、温かい眞理が含まれてゐる。それは人間的でもあり、また宗教的でもある深い心持を含んでゐる。その中には、しみじみと心に觸れるものがあり、はしないか。そしてその眞理を若しほんたうに心から感ずることができたならば、私たちは今知らず識らず行つてゐるやうに、互に憎み合つたり、争ひ合つたり、謗り合つたりしないで、互に愛し合ひ、互に理解し合はなくてはならないと思ふ。

友だちや縁者のもとよりのこと、たとひ敵でも、全く縁なくて過ぎてしまふ人よりはよい。佛教に順縁といひ逆縁といふことがあ

他生の縁

眞理

順縁
逆縁

るが、友だちが順縁の知己であるならば、敵は逆縁の知己でなければならぬ。さうだ、敵は逆縁の友である。どんなに憎み合ひ、傷つけ合はうとしてゐても、すでにそれだけ互に關係し合つてゐるといふことに、なみなみならぬ意味が見出されはしないか。互に空氣のやうに見過すことに比べれば、敵と敵とは互にその價値を見出し合つてゐるものである。互に尊重し合つてゐるものである。それをほんたうに心から感ずるやうになつたならば、私たちは互に罵り合ひ、憎み合ふことをやめるであらう。

人を人に結び付ける事情は、たとひどんなにいふに足らぬものであらうとも、かやうに深く深く考へて行つたならば、限り知れず尊いものであることが感じられてくるのだ。

私たちを大海に漂ふ一つの浮木と觀する時、私たちの心には、靜かな、そして稍悲しいやはらぎの思、和解の思が湧いてくるではな

地盤

いか。愛について思ふ時、愛について語らうとする時には、私たちはまづこの和睦の氣持、やはらぎの心に注意して見なければならぬ。誠の愛は、かやうな平和な、おだやかな、あきらめ「の地盤の上に咲出づる花ではないであらうか。もつとはつきりいつたならば、無常を觀ずる心こそ、誠の愛を生む胎ではないであらうか。」

私たちがいつかは死なねばならぬ人間の身であることを眞實心から感じ得たならば、誰が些細なことに無益な争を演ずるであらう。しかも私たちは、一人残らず死ねべき人間だ。若し私たちが一週間の後には残らず死なねばならぬことがわかつてゐたとしたら、私たちは今現にやつてゐるやうに、空しい名利の争に執して、互に憎み合ひ罵り合ふことをやめるに違ひない。そして一週間と五十年とは、永遠の時の前には何の相違があらう。

— 智慧に輝く愛 —

名利の争

(一)延元元年五月
(二)足利尊氏。正
平十三年(一
〇一八年)歿、
年五十四。
相語らふ

(三)第九十六代後
醍醐天皇。
(四)恒良親王。後
醍醐天皇の第
六皇子。延元
三年(一九九
八年)薨。年十
五。
(五)藤原實世。正
平十三年歿。
年五十一。
(六)新田義貞。吉
野朝の忠臣。吉
野元三年戰死
年三十八。

内侍所

七 吉野の行宮

北 畠 親 房

五月にも成りぬ。尊氏等西國の兇徒を相語らひて、重ねて攻上りぬ。官軍利なくして都に歸り參るほどに、同二十七日また山門に臨幸し給ひけり。八月に至るまでたびたび合戦ありしかど、官軍進まざりき。

十月十日の頃にや、主上山門より還幸いとあさましかりしこともなれど、なほ行末を思し召す道ありしにこそ。東宮は北國に行啓あり。左衛門督實世卿以下の人々、左中將義貞朝臣をはじめて、さるべきつはものも數多仕うまつりけり。

同十二月に忍びて都を出でましまして、河内の國に正成といひしが一族を召具して、吉野に入らせ給ひぬ。行宮を造りて渡らせ給ひ、もとの如く在位の儀にてぞましましける。内侍所も遷らせ給ひ、

神璽も御身に隨へ給ひけり。誠に奇特のことにこそありしか。吉野の行幸に先立ちて、義兵を起すやからもありき。臨幸の後には國々にも御志あるたぐひ數多聞えしかど、次の年も暮れぬ。



陸奥靈山に據る北畠顯家
(秋長田磯)
(筆)

またの年戊寅の春二月、鎮守府大將軍顯家卿また親王を先立て申し、重ねてうち上りぬ。海道の國々を悉く平げて、伊勢、伊賀を経て大和に入り、奈良の京になん着きにける。それより所々の合戦數多たび、互に勝負ありしに、同五月和泉の國石津といふ所にての戦に、時や到らざりけん、忠孝の道ここに極りにき苔の下にもうづもれぬものとは、

(一)源顯家。吉野朝の忠臣。北畠親房の子。延元三年戰死年二十一。
(二)義良親王。

(三)和泉國(大阪府)泉北郡。
時や到らざりけん
(四)もろとも。昔の下には朽ちすして、うづもれぬ名を見るを悲しき。(金葉集、和泉式部)

(一)山城國(京都府)綴喜郡木津川南岸の小山。頂上に八幡宮が在つて、俗に八幡山、鳩峰などと呼んでゐる。空しくさへなりぬ。いふばかりなし。

(二)源顯信。吉野朝の忠臣。正中戦死。

節度

儲君

たゞ徒に名をのみぞ留めし。心うき世にもありしか。官軍なほ心を勵まして、男山に陣を取りて、暫く合戦ありしか。朝敵忍びて社壇を焼拂ひしより、事成らずして引退きぬ。北國なる義貞もたびたび召されしか。ど上りあへず、させることなく、空しくさへなりぬと聞えしかば、いふばかりなし。

さてしも止むべきならずとて、陸奥の皇子また東へ向かはしめ給ふべき定めあり。(二)左少將顯信朝臣中將に轉じ、從三位に叙せられ、陸奥介鎮守將軍を兼ねしめて遣されぬ。東國の官軍悉くかの節度に從ふべき由を仰せられぬ。親王は儲君に立たせ給ふべき旨申し聞かせ給ひて、道のほどもかたじけなかるべし。國にてはあらはさせ給へ。となん申されし。異母の御兄も數多ましましき。同母の御兄も前東宮恒良親王、成良親王ましますに、かく定まり給ひぬるも、天命なればかたじけなし。七月の末、方伊勢へ越えさせ給ひて、神宮

おどろおどろしく

(一)伊豆半島の最南端の一角。一名石廊岬。

(二)尾張國知多郡の篠島。

(三)霞浦。

めづらか

こはし

に事の由を啓して、御船のよそひし、九月の初め纜を解かれしに、十日餘りのことにや、上總の地近くより空の氣色おどろおどろしく、海上荒くなりしかば、また伊豆の崎といふ方に漂はれたるに、いとど波風夥しくなりて、數多の船ゆき方知らずなりにけるに、皇子の御船のみは障なく、伊勢の海に着かせ給ひぬ。顯信朝臣はもとより御船にさぶらひけり。同じ風の紛れに、東をさして常陸の國なる内(三)の海に來着きたる船ありき。方々に漂ひしなかに、この二つの船、同じ風にて東西に吹分けられぬ。末の世にはめづらかなる例にぞあるべき。儲の君に定まらせ給ひて、例なき鄙の御住居もいかかと覺えしに、皇大神の止め申させ給ひけるなるべし。後に吉野に入らせましまして、御目の前にて天位を嗣がせ給ひければ、いと思ひ合はせられて、尊くもありしか。また常陸は元より心ざす方なれば、御志あるやから相謀らひて、義兵こはくなりぬ。奥州、野州の守も、次

(一)「ぬるがうち
に見るをのみ
をや夢といは
んはかなき
世をもうつ
とは見ず。」
(古今集 壬生
忠岑)

(二)藤原經忠。正
平七年二〇
五十一。薨年

(三)第十四代。

(四)應神天皇。

の春重ねて下向して、各國に就きにき。
さても八月の十日餘り六日にや、秋霧におかされさせ給ひて、隠
れましましぬとぞ聞えし。寝るがうちなる夢の世、今に始めぬ習と
は知りながら、かずかず目の前なる心地して、老の涙もかきあへね
ば、筆の迹さへ滞りぬ。かねて時をも覺らしめ給ひけるにや、前の夜
より親王をば左大臣の第に遷し奉られて、三種の神器を傳へ申さ
れぬ。後の號をば仰のまゝにて、後醍醐の天皇と申す。

昔仲哀天皇熊襲を攻めさせ給ひし時、行宮にて神去りましまし
き。されど神功皇后ほどなく三韓を平げ、諸皇子の亂を鎮められて、
胎中(四)の天皇の御代に定まりき。この君聖運ましまししかば、百七十
餘年中絶えにし一統の天下を知らせ給ひて、御目の前にて日嗣を
定めさせ給ひぬ。功もなく徳もなきぬすびと世に起りて、四年餘り
がほど宸襟を惱まし、御世をすぐさせ給ひぬれば、御怨念の末空し

くありなんや。今の御門また天照大神よりこの方の正統を受けま
しましぬれば、この御光に争ひ奉るものやはあるべき。なかなかか
くて静まりぬべき時の運とぞ覺ゆる。
——神皇正統記——

八 新緑の頃

近松 秋江

自然の美に心酔し、自然の恩寵を心から感謝しながら、柔かい自
然の懐に入つて、甘えたいやうな氣持にさせられるのは新緑の頃
である。

新緑の頃になると、私は年少の頃から、たゞ何故となく懐かしい
といふ感情が、胸の底から湧起るのが常である。その感情は何を對
象として起るのであるか、明らかにはわからない。満目蕭條たる冬
の季節から、天地が生々の氣に蘇つて來て、自然は豊麗な色彩で飾
られる。この四圍の環境の變化が、人間をして自ら生存の幸福を意

心酔す

自然の寵兒

識し、生命の躍動を覚えしめるからであらう。その頃になると、人々は戸内よりも野を思ひ、山を慕ひ、草木に親しむやうになる。どこかの青い芝生の上で仰向に寝轉んで、思ふ存分に自然の寵兒になつて、人間生活の苦味を忘れて見たいやうな氣がする。

野にはもう菜の花の黄もすがれて、却つて白い菜の花がいつまでも咲續けてゐる。その花の生まれ代りでもあるかのやうな黄や白の蝶々も老いて、たうの伸びた衰残の花から花へと戯れてゐる。青い麥は穂をぬいて來た。そら豆や豌豆の莖が成育して、淡紫の花がもの憂い五月の日に照らされてゐる。蓮華草の紅紫色な花は今が盛で、所によつては、農夫は稻を植ゑる爲に、それ等の野草を掘返して、水田に水をしかけてゐる。春雨の降りかさんだ小溜りの用水は、畦の小草を浸して、どぶどぶと流れてゐる。どこからともなく

小蛙の啼く聲が懐かしく聞える。かういふ時、私はたゞ生きてゐることの幸福を覚え、生命の愉快を感じる。そしてそれと共にまた、静かに暮れて行く晩春の日の永いのに倦み、夕暮の新緑に映る灯の色の懐かしさにも、何とは知れず聊かももの足りないわびしさや、淡い哀愁をそゝられることもある。

東京の郊外(一)の住宅にゐても、五月の中頃がちやうど新緑の最もいい時期である。春宵千金といふが、花期よりも寧ろ新緑の頃の方が、眞(二)に一刻千金である。天は人類に對して時に冷酷なこともあるが、たまにはまた惠深いといふことを思はしめる。新緑の頃には、人は最も天の惠を感謝する氣にならされる。朝起出で、静かな旭に映發してゐる軟かい黄緑の色に對するのは、何ともいへないほどよい。この頃の常として、日中にはよく風が起るが、よい夕方になると、晝間の風は静まり、遠くの田園の森や家の彼方には、蒼茫として一

(一) 東京市外中野。

(二) 春宵一刻直千金。花有清香。二月有陰云々。蘇東坡。

晚霞

(一)岡山縣和氣郡
藤野村

抹の晚霞がたなびいてゐる。私はそんな夕方には、何となく家に閉籠つてゐるのが惜しいやうで、餘り遠くない所の森や、木立の多い郊外の住宅地のまはりなどを逍遙して見る。たゞそれだけの散歩が、何ともいへず楽しい。そして、氣分を和げる。さうすると、まだ年少の頃、田舎にゐた時分のことなどが懐かしく想ひ起される。青い穂をぬいた麥の畑の間の野徑を歩いて行く、微かに柔かい植物性の匂がして、四方を顧望すると、野も山も清しい新緑を装ひ、遠くの山は淡蒼く霞がたなびいてゐる。野から戻つてくる村の童子が麥の莖を取つて、それを器用に口笛にして吹いて行く。

新緑の頃には、どこへ行つても、すべてこの世界が美しく楽しいものに思はれる。その新緑も、やがて夏が來、秋が來、冬がくれば、空しく枯れるものだ。と知りながらも、そんなことなど勿論考へる暇も

愚痴をこぼす

(一)京都府久世郡
宇治町、京都
の南方

なく、たゞ眼に見る清々しい生き生きした緑の世界が、人間をして生存をたゞ樂しく思はせる。夏の暑さ、冬の寒さには、つい愚痴をこぼすものがあつても、この新緑に對して愚痴をいふものはなからう。



宇治 田南岳瑋(筆)

私は或年、それはもう五月の末頃であつたが、京都から宇治の方を巡つて、奈良の方へ旅したことがある。桃山から宇治へ行つた日は、ひどい嵐であつたが、その夜宇治に泊つた時には、嵐はあつらへ向の雨になつて、しとしとと一晩ぢゆう若葉に降りそゞ音を聽いて静かな夜を明かし、心行くばかり宇治の新緑を味はつて、翌日雨の晴れかけた午頃からそこを立つて、奈良の方へ向かつた。汽車

(一)水源は伊賀盆地。南山城を流れて澁川に合する。

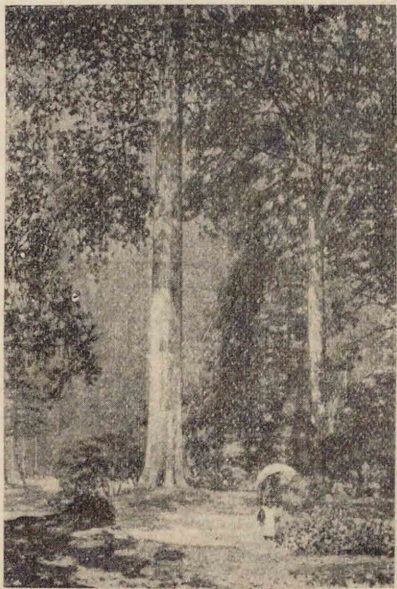
(二)近江、伊賀、大和にわたる山脈。

ものものし

(三)大和、伊勢、紀伊に跨がる山脈。

の窓から見てみると、南山城のそのあたりは、殊のほか新緑の美しい所である。柿の若葉などが殊に多く見られる。やがて木津川を渡り、木津驛を経て奈良の方へ行くと、午前一旦晴れかゝつた空は、その頃の氣候の常として、再び雨模様。雲が湧いて、それが次第に濃厚になつて來た。そして笠置山脈に續く奈良の東方の連山には、墨を流したやうな黒雲が、ものものしく中空を鎖して、その爲に山の形が一層鮮かに浮上つて見えた。

その時私は、奈良を通り過ぎて法隆寺へ行く道すがら、大和平野の遠景近景を、心行くばかり車窓から眺めた。大臺ヶ原であらうか、



(筆助之森本山) 良奈の緑新

(一)奈良の南方。

青黛色

それとも奥吉野の金峰山脉の一角でもあらうか、初瀬から多武峰に續く一帯の連山の上に當つて、遠く峻嶒な高山の頂が幽かに望まれるのも佳い眺であつたが、少し右手の方の西南に當つて、金剛山が青黛色をなして、巍然として聳えてゐるのが、何ともいへず崇美であつた。それは春も十分に熟した新緑の頃でなければ見られない山の色、野の景色であつた。それにつけても思ふのは、蕪村の句に、

大和路や宮もわら屋も燕かな

といふのがある。燕は晩春初夏の新緑の頃には、どこからともなく飛んでくる小鳥である。そしてこの蕪村の句は、實によく大和路の特徴を、僅かに十七字で遺憾なくいひ表してゐると思ふ。

また或年のこと、同じ大和路を経て、新緑の初に吉野へ行つた。まだずつと奥の方へ行けば、櫻はいくらか残つてゐるといふことで

沛然
鳴りはためく

あつた。晝間から強い南の風が吹荒んでゐたが、山を登つて行く頃、一天眞暗にかき曇つて、その晩遅く宿に着いて、一浴の後夕飯を認めてゐる時分から、山を流すかと思はれるやうな凄じい豪雨が沛然として來つて、雨戸に鳴りはためいた。私は何となく悲壯な感慨



(筆璋岳南田) 山剛金

を以て、吉野の雨聲を聽いてゐた。ところが翌朝になると、一山の風物は拭つたや

(一)後醍醐天皇の御陵

うに清朗になつて、後醍醐天皇の吉野宮址に立つて四顧すると、金剛山は昨夜の雨に洗はれて、匂ふばかりに懐かしく、西方の天に浮上つて見えた。私はそれから櫻の若葉の蔭を踏んで、延元陵に詣でたのであつた。

(一)Anemone.

絢爛



(筆爾觀林小) くやくやし

九 五月の太陽

萬造 寺齊

初夏、

もうアネモネは盛を過ぎ、

たんぼゝの花も終りに近づき、

今絢爛たる芍薬と、火焰の如き

けしの季節。

見わたす京都の郊外は目覺め

るばかり新緑に輝き、

花の匂、若葉の匂、土の匂、肥料の

匂、

そのほか無数の名状し難い微

馥郁

(一)京都府(山城國)葛野郡花園村



(筆山司田宮) しけ

馥郁として大地を蔽ふ。
妙な匂が

(一)花園、太秦、嵯峨、嵐山……
林を横ぎり、
小川を渡り、
若草を踏み、
木蔭にいこひ、
人家の間を通りぬけつゝ、
白いほこりつばい田舎道を
足にまかせて杖をひけば、
五月の大氣の柔かさ、
五月の日光の暖かさ、



(筆郊雨林小) 岨 嵯

五月の微風の芳しき。

名のない路傍の雑草も時を得顔
に蔓延し、
飽くまで榮養を吸収しつゝ成長
を急ぐ牛蒡、豌豆。
柔かい、みづみづしい豊熟に近い
一面の穂麥。
樹木の繁茂。
雲雀の狂喜。
昆虫の飛翔。
重疊しつゝ起伏しつゝ地平を限
る緑の連山。

南へ急ぐ溪流の喜び勇む不斷の跳躍……

大地はうごめく。

自然の胸は激しく波打つ。

(私は神秘的な交感により自分の全身全靈にその力
強い脈搏を、その快い體温を、その芳しい呼吸を感
ずる。)

創造するもの、成長するもの、

醗酵するもの、奔放な精神、

その憧憬と情熱と、

その憤激と昂奮とは、

息づまるほどあたりに充ち満ち、

洪水のごとくあたりに渦巻く。

交感

奔放

陶醉

私は大きく胸を張り、

渴いたものの慾深さで、

あたりに漲る五月の靈氣を、

自然の無量のいのちを吸ひこむ。

(あゝ、喜ばしいこの若がへり)

私の眼は昂奮に輝き、

私の血は陶醉に燃え、

私のいのちは健康に溢れ、

私はすべての成長するものと、

すべての歡喜し陶醉するものと

共に五月の太陽を、

その永久の光耀を讃へる。

一〇 學者の事業

(一)前東京帝國大學教授文學博士上田萬年
(二)東京高等師範學校教授文學博士松井簡治
心祝

十年一昔といふことを思ふと、上田^(一)松井^(二)の二君が國語辭書の編纂に着手されてからも、一昔はとくに濟んだ。編纂開始の心祝といふので、知友數名が晚餐會に招かれてうち興じたのは、ついこの間のやうな氣もするが、その頃始めて小學校に入つた余が娘は、すでに人に嫁いで、人の子の母となつてゐる。短いやうで長いものである。今やその第一巻が愈出版になるといふ音づれを聞いて、余は初孫の誕生を見た時と同じやうな、しかもそれよりは大きい一種の喜悅を禁じ得ないのである。

年の流

年の流は水の流と同じく、世事の變遷は行く雲のやうに窮りがない。この一昔の間には、日露戰役といふ大事件が起つて、我が日本の國勢を一變せしめた。政治や、軍事や、工業や、貿易やの進歩發展の

工程

(Card)
ここでは採集
語用紙

(一)東京市小石川區關口駒井町

跡を見ても、その間の十年は通常の十年ではなかつた。二君の編纂事業は、かういふ中に徐々とその工程を進めて行つたのである。鑛山から掘出されて選分けられ、鑄分けられて行く鑛石のやうに、幾萬、幾十萬といふ古語や新語は、幾百部、幾千部の典籍圖書の中から摘出され、拾集されて、書留められ、整理される。編輯室に山を成したカードは、次第に墨やインキで染められて行く。一月、二月、三月、四月、春も逝き秋も暮れて、曆も幾たびか改る。同じ仕事が無事なく續く。傍から見れば抄の行かぬことは齒痒いやうで、いつ方のつくことかと危まれるほどであつた。編輯室は松井君の邸内^(一)の離家にあるが、それでも夜半の半鐘に肝を冷して、餘所ながら無事を祈つたことも幾たびかわからぬ。二君の筆と頭腦とは間斷なくこの間に活動して、取るものは取り、捨てるものは捨て、その進捗は遅いが、その成果は確實であつた。かくて粒々積上げた砂子も遂には山を

成す諭のやうに、編纂の稍緒に就いた頃までには、鐵道は何千哩落成の祝賀會を催したし、何萬噸といふ軍艦は幾隻となく進水式に浮かび出たのであつた。

學者の仕事はぢみである。目覺しく世人を驚かすやうなことはない。二君が拮据十餘年の編纂事業も、靜かな一室に靜かに行はれたのである。けれども一たびその室に入つて山成す材料を見上げるものは、何人もその難事業たることを承認せずには居られぬ。また編纂者の決心と根氣とを尊敬せずには居られぬ。さうしてそれが決して學者の閑事業ではなくして、實は國家的大事業であつたことに考へ到らなければならぬ。國民精神の基礎、随つて國民教育の根柢となる國語の調査整理が、現今に緊急であることはいふまでもない。國家は軍備ばかり進んでも一等國とはいはれぬ。あらゆる方面の發展は教育の力に依らねばならず、教育の進歩も國語の

拮据

閑事業

緊急

普及が根本である。狭い編輯室に行はれて、何等世人の注意を惹かなかつた學者の研究が、實は絶大な國家的事業であつたといふことに於て、學者の生命があり、學術の意義があるのである。十年以前に比べて鐵道の哩數や、軍艦の噸數の大いに増加したのを祝する人は、これと同時に、數隻の巡洋艦で満足して居つた我が國語界が、十餘年後の今日、一大戰艦にも譬ふべき本書を有するに至つたことを驚歎し、歎美しなければならぬ。文物の整備するのは國家の誇であり、飾である。また精神界を支配する大きな武器である。完全な一辭書の存在することも、國民に取つての立派な強みになる。この一大産物が堅忍不拔な二君の手に依つて成就されたことは、友人たる余のいひしらぬ喜悅を感じざる所以である。この十年は國語界に於ても、また無意味な十年ではなかつたのである。

學者の事業はいつも世間と没交渉のものではない。専心な研究

紛糾す

は書齋の中から起つても、世間は常に研究の題目となるものである。辭典の編纂に於ては、進歩して行く世間を一日も餘所に見て居るわけには行かぬ。十年一昔の間には、國語そのものの中にも絶えず變遷が行はれて居る。それに注意するだけでも容易なことではない。靜寂な編輯局は、紛糾した實社會と常に相往來して居るのである。

幾多の困難にうち克つて、國民の覺知せぬ間に、その背後に大きな國家事業を建設された二君の勞苦は、今更述べるには及ばぬ。思ふに後世の人は、必ずこれを明治時代に企てられて大正時代に完成した大事業の一つに數へるであらう。

余は二君の満足と喜悅とを察知すると同時に、今か今かと十餘年を待暮した同友と共に、まづ二君の成業を祝して、一大白を浮かべようと思ふのである。

一大白

(一)名は政一。醒雪はその號。國文學者。京都文學博士。六十六年歿。大正十六年歿。

世紀
間。世紀は百年

ことばの話 (自修文)

(一) 佐々 醒雪

不思議なものは、ことばの變遷である。日本語は幸にして二千年近い記録を存してゐて、世界で頗る古い言語の一つである。しかも萬世一系の帝室を戴いた同一民族の間のみ發達したので、今から約千年前にできたといはれる竹取物語や伊勢物語を見ても、半分以上は、今日も平生使用してゐる言語でできてゐる。こんな



雪

國はいふまでもなく、世界中にまたとはないのである。一千年前即ち十世紀前といへば、今の歐洲列強國などは、皆全くの野蠻國であつた。かく久しい時代を経てゐるから、同じ語でも、その意味の頗る變化したものが多。

例へば、甚だしく變遷したものは、「いへ」といふ語であらう。昔は「いへ」といふと、家族とか家庭とかいふことで、隨つて、「いへあるじ」といへば、一

主長
かしら。

薄倖者
ふしあはせな
人。

雲泥の違ひ
大變な違ひ。

家族中の主長で、即ち戸主のことであつた。然るに今日「家」といふと、家屋即ち建築物のことで、「いへぬし」は貸家の持主の義に用ひられてゐる。

更に甚だしく變化してゐるのは、形容詞などに多い。例へば、平安朝の人が「あはれなる人」といふと、大抵は美人のことである。我々が貧民や薄倖者を「あはれなる人」といふのは、雲泥の違ひではないか。「かなし」といふ語も今日では悲哀の義にのみ使ふが、古は極めて寵愛してゐる妻や子のことを、「かなしき妹」とか、「かなしくする兒」とかいつた。

かういふ變遷は、そんなに古い時代ばかりではない。漢語が頻りに用ひられ始めてからも、同様な變化は認められる。例へば、「不用」といふ語は、今日では「入用でない」といふことであるから、紙屑買が「御不用物はございませぬか」と呼んでくる。然るに中古では「不用なるもの」といふと、用ひるに堪へぬとんまか、あはうのことで、更に降つて武家時代に入ると、「爲朝が不用であつたから、父爲義が九州に追つた。」などと記してあつて、不用といふのは、いたづらもの、または無法者の義である。鎌倉時代に「不用なものはございませ

んか。」と呼歩いたら、「いたづらものはないかね。」と呼歩く鼠取薬と間違へられたであらう。

語源
ことばのもと。

列擧
かそへあげる
こと。

抹茶
製茶を茶臼で
ひいて粉にし
たもの。

これ等はまた單なる變遷で、中にはその變遷の間に、語源の意義に對して奇怪な矛盾を生ずることもある。漢方醫が廢れて薬を煎じることがなくなつても、薬鐘といふ名が残つてゐたり、その他不思議な言葉を列擧すれば際限もないが、就中希代なのは、「茶碗」や「さかな」である。

日本でまだ立派な陶磁器のできぬ頃、支那から渡つて來た上等な陶磁器は、専ら抹茶の席ばかりに用ひたから、これを茶碗といつたのである。然るに日本で硬い上等なものが澤山できると、御飯を食べるにも、番茶を飲むにも陶磁器を用ひはじめた。そこで飯食茶碗とか、茶飲茶碗とかいふ不思議な語ができた。今日では珈琲茶碗とさへいつてゐる。茶を飲むのが茶碗なら、飯を食ふのや珈琲を飲むのは、飯碗、珈琲碗とでもいひさうなものだが、さう理窟通りに行かないのが言葉である。

「さかな」とは、本來酒を飲む時に食ふものといふ語である。「さか」は「酒樽」

副食物
おかし。

下戸
酒のきらひな
もの。

たづさはる
關係する。從
事する。下
級の大工。

「酒盃」の「さか」である。「な」は何でも副食物にするものことで、古は野菜類は勿論皆「な」であるし、昆布や若布などのやうな食べられる海藻は皆磯菜といった。それから魚類は「な」のなかの上等なものであるから、上等な建築用材を「ま木」といひ、屋根を葺く上等な草を「ま草」といふやうに、これを「まな」と稱へた。今の「まな板」「まな箸」などいふ語は、これから來てゐる。然るに酒といふものは上戸即ち上等な家でなくては飲用しないし、且つ酒を飲む時は、今も昔も贅澤な副食物を求めることが普通であるので、自然魚類は酒席に多く供せられて、「さかな」といふ異名を得るやうになつた。すでに魚類が「さかな」といふことに定まつてしまふと、下戸が食べてもやはりこれを「酒な」といふのは、飯を食べてもやはり茶碗といふのと、同じ不思議である。言葉はまた使つてゐる中にだんだん下落するものである。例へば、「大工」といふ語は工即ち工藝家中の俊秀なもの尊稱で、多くの小工どもの統領を呼ぶ名であつた。然るに今日では建築事業にたづさはるものは、小屋掛のたゞき大工でも、やはり大工である。かの棟梁、親方なども同様で、今日では一人の手

下もない、子分のない男でも、印半纏さへ着てゐれば、即ち親方であり、棟梁である。

故意に
わざと。
轉訛
かはりなまる
こと。
江戸歌舞伎
江戸で行はれ
た芝居
人爲的
人の力でこと
さらに作ること。
變造語
つくりかへた
ことば。

齋宮
いつきのみや
ともよむ。皇
女で大神宮に
お仕へになる
方。

窮極
はて。

最後に一つ故意に轉訛させた例を示さう。言語の變遷は大抵自然のものであるが、江戸歌舞伎などには、故意に作つた人爲的な言葉がある。一時、兵隊言葉といつて、丸木橋を獨木橋といつたり、一軒家を獨立家屋といつたりしたこともあつたが、今ではそれも廢止されたやうだ。その他には迷信から來た變造語もいろいろある。例へば、海邊に生えてゐる蘆といふ草を、「悪し」と聞えるといつて、わざと「よし」と呼びかへたり、四を「死」と通ずるので、「よ」といつたり、梨を「ありの實」、硯箱を「あたり箱」、鯛を「あたりめ」といふ類が行はれてゐる。古も伊勢の大神宮に御奉仕になる齋宮の御所では、髪のない僧侶を、わざと「髮長」などといつた例もある。

要するに、言語界の不思議な現象は、同一の語が、例へば、髮長といつて髪のないことを表すやうに、正反對の意味にさへ用ひられるのであるから、その變化は蓋し窮極を知るべからずといふのが至當であらう。

醒雪遺稿

(一)京都市の西郊花園にある。宇多法皇の創建。俗に御室といふ。
(二)共に石清水の麓にある末寺。末社。かばかり

本意



舞のへなか 一のそ (筆邨青田前)

一一 仁和寺の法師 吉田兼好

一 石清水

仁和寺にある法師、年よるまで石清水を拜まざりければ、心憂くおぼえて、或時思ひたちて、ただ一人かちより詣でけり。極樂寺、高良などを拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さて、かたへの人に逢ひて、年比思ひつることはたしはべりぬ。聞きしにも過ぎて、尊くこそおはしけれ。そも参りたる人毎に山へ登りしは、何事かありけん、ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。とぞいひける。少しのことに先達はあらまほしきことなり。

二 かなへ

これも仁和寺の法師、童の法師にならんとする名残として、おのおの遊ぶことありけるに、酔ひて興に入る餘り、傍なる足がなへを取りて頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻をおしひらめて、顔を差入れて舞出でたるに、満座興に入ること限りなし。しばし奏でてのち、抜かんとするに、おほかた抜かれず、酒宴こと醒めて、いかがはせんと惑ひけり。とかくすれば、首のまはり缺けて血垂り、たゞ腫れに腫れみちて息もつまりければ、うち割らんとすれど、たやすく割れず、響きて堪難かりければ、かなはで、すべきやうなくて、三足なる角の上に帷子をうち掛けて、手をひ

かづく

たゞ腫れに腫る



三のそ (筆邨青田前) 舞のへなか 二のそ (筆邨青田前)

が
り
ゐ
て
行
く

く
ど
も
り
聲

か
ら
き
命
ま
う
け
て

き、杖をつかせて、京なる醫師のがりゐて行きけるに、道すがら人の怪しみ見ることに限りなし。醫師の許に差入りて、向かひゐたりけん有様、さこそ異様なりけめ。ものをいふにも、くゞもり聲に響きて聞えず。かゝることは書にも見えず、傳へたる教もなしといへば、また仁和寺に歸りて、親しきもの、老いたる母など枕上によりゐて泣悲しめども、聞くらんとも覺えず。かゝるほどに、或者のいふやうは、たとひ耳鼻こそ切れうすとも、命ばかりはなどか生きざらん。力をたてて引き給へ。とて、藁のしべをまはりに差入れて、かねを隔てて、首もちぎるゝばかり引きたるに、耳、鼻かけうげながら抜けにけり。からき命まうけて、久しく病みゐたりけり。

一 二 土の匂

長 塚 節

春は空からも、土からも微かに動く。毎日のやうに、西から埃を卷

は
や
て
空
際

蟄
居



長 塚 節 (平福百穂筆)

いてくるはやてが、どうかするとはたと止つて、空際にはふはふはして綿のやうに白い雲が、ほつかりと暖かい日光を浴びようとして、僅かに立騰つたといふやうに、じつと動かずにあることがある。水に近い湿つた土が、暖かい日光を念ふ一杯に吸つて、その勢づいた土の微かな刺戟を根に感じさせると、田圃の榛の木のおみな蕾は、目に立たぬ間に少しづつ伸びて、ひらひらと動き易くなる。その刺戟から、蛙はまだ蟄居の状態に在りながら、稀にはそつちでも、こつちでも、くゝくゝと鳴きだすことがある。空から射す日の光は、そろそろと熱度を増して、土はそれをいくらでも吸つて止まない。土はすべてをだんだんと刺戟して、堀のほとりには蘆や、芝や、その他の草が空と相映じて、すつきりとその首を擡げる。軟かさに満たされ

た空氣を更に鈍くするやうに、榛の木の花はひらひらと止まず動きながら、煤のやうな花粉を撒散らしてゐる。蛙は假死の状態から離れて、軟かな草の上に手を突いては、驚いたやうな様子をして、空を仰いで見る。さうして彼等はあわてたやうに聲を放つて、その長い睡眠から復活したことを空に向かつて告げる。それで遠く聞く時は、彼等の騒がしい聲は、たゞ空にのみ響いて、快げである。

ためらふ
本性

彼等は更に、春の到つたことを一切の生物に向かつて促す。草や木が心づいて、その活力を存分に發揮するのを見ない中は、鳴くことを止めまいと力める。田圃の榛の木は疾うに花を捨てて、自分から先に、嫩葉の姿に成つて見せる。黄色みを含んだ嫩葉が、爽かな朝日を浴びて快い光を保ちながら、蒼い空の下にまだためらつてゐる周囲の林を見る。岬のやうな形にはつてゐる水田を抱へて、周囲の林は漸くその本性のまにまに、勝手に白つほいのや、赤つほいの

硬直
空間

や、黄色つほいのや種々に茂つて、それが氣がついた時に、急いで一つの深い緑に成るのである。雜木林のそこらこらに散在してゐる開墾地の麥も、すつと首を出して、蠶豆そまの花も可憐な黒い瞳を聚めて、羞しさうに葉の間から、こつそり四方をのぞく。雜木林の間には、また芒の硬直な葉が空を刺さうとして立つ。その麥や芒の下に居を求め、雲雀が、時々空を占めて、春がふけたと呼びかける。さうすると、その同族の聲のみが空間を支配してゐるべきはずだと思つてゐる蛙は、その囀る聲を押し去らうとして、互の身體を飛越え飛越え鳴きたてるので、小勢な雲雀はすつとおりて、麥や芒の根に潜んでしまふ。さうしては蛙の鳴かぬ日中のみ、これを仰げばまばゆさに堪へぬやうに、その身を遙かに煌く日の光の中に没して、その小さい喉のちぎれるまでは、劇しく鳴らさうとするのである。蛙は愈益、鳴きほこつて、樅の木つばきのやうな大きな常磐木の古葉をも、

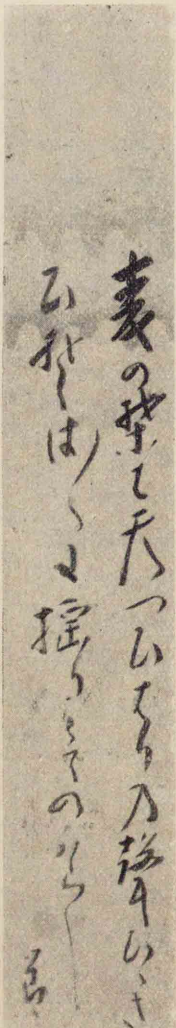
聲を呑む

一時にからりと落さねば止むまいとする。

この時、すべての樹木や、それから冬季の間には、ぐつたりと地に附いてゐたすべての雑草が爪立して、たゞ空へ空へと暖かな光を求めて止まぬ。土がそれをじつと引きとめて放さない。それで一切の草木は、土と直角の度を保つてゐる。冬季の間は土と平行することとを好んでゐた人も、鐵の針が磁石に吸はれる如く、土に直立して、銘々に手に農具を執る。紺の股引を藁で括つて、皆田を耕し始める。水が欲しいと思ふ時、蛙は一齊に、裂けるかと思ふほど喉の袋を膨脹させて、身を撼かしながら、殊更に鳴きたてる。白い絨絲のやうな雨は、水が田に満ちるまでは、注いでまた注ぐ。鳴くべき時に鳴く爲にのみ生まれ來た蛙は、刈株を引返し引返し働いてゐる人々の周圍から足下から逼つて、敏捷にその手を動かせ動かせと促して止まぬ。蛙がびつたりと聲を呑む時には、日中の暖かさに人もぐつ

麥の葉は天の
つひはきりの
ひはきりの
とほくきひの
揺らしめての
ふらしめての
節

たりとなつて、田圃の短い草にごろりと横になる。更にひつそりと靜かな夜になると、蛙はいかに自分の聲が遠く且つ遙かに響くかを誇るやうに、力を極めて鳴く。雨戸を閉ぢる時、蛙の聲はめつきり遠く隔つて、それがぐつたりと疲れた耳をくすぐつて、百姓のすべてを安らかな眠に誘ふのである。熟睡することによつて、百姓は皆



長塚節筆蹟

短い時間に肉體の消耗を恢復する。彼等が雨戸の隙間から通す夜明の白い光に驚いて、蒲團を蹴つて外に出ると、今更のやうに耳に迫る蛙の聲にその覺醒を促されて、井戸端の冷たい水に全く朝の元氣を呼返すのである。草木は遠く遙かに響けと鳴くその聲に揺られつゝ、夜の間には生長する。櫟や、檜や、その他の雜木は、蛙が鳴けば

鳴くほど、さうしてそれが鳴きやむ季節までは、いくらでも繁茂すること
を繼續しようとする。そこには、毛蟲やその他のあさましい損害が或は
あるにしても、しとしと屢、梢を打つ雨が、空の蒼さを移したかと思ふやうに、
力強い緑が地上を掩うて、爽かな涼しい蔭を作るのである。

— 五十一 —

一三 箱王仇に遇ふ

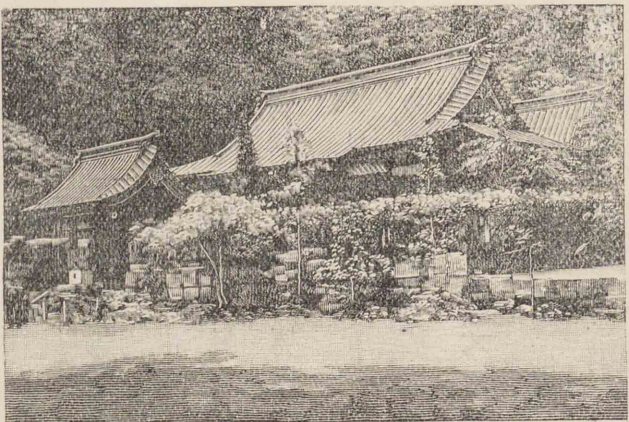
かくて箱王は、御奉幣の時までも一人も連れず、介錯の僧一人相具し、
御座所の後に隠れゐて、御供の人々を、彼はたぞ。此はいかに。と委しく問ひ
ければ、この僧鎌倉の案内者にて、大名、小名の名よく知りたれば、教へけり。
されどもいまだ祐經をば明かさず。あはれ問はばやとは思へども、怪しく思はれ
じとて、残りの人を問廻す。君の左の一の座はたぞ。彼こそ秩父の重忠よ。右の一の座
はいかに。これ

(一)河津祐泰の子曾我五郎時致の小子。祐泰は工藤祐經に殺され、母は信に再嫁した。當時箱根権現の僧行實の弟となつてゐた。介錯(二)工藤祐經。叔父伊東祐親に怨を含み、祐泰の子河津祐泰を殺した。(三)源頼朝。(四)畠山重忠。武蔵秩父の豪族。

(一)和田義盛。相模國三浦の豪族。(二)里見義成。

めて

(三)祐泰は伊豆の河津を領してゐたので、これを姓とした。



ぞ三浦の義盛なる。さてその次は誰人ぞ。里見の源太といふ人よ。さてその次は、豊島の冠者といふ人なり。たゞ今もの仰せらるゝは誰やらん。これこそは當時聞ゆる梶原平三景時とて、さぶらひどもの鬼神に思ふものよ。まためての方に少し引きのきて、半装束の珠數持ちて香の直垂着たるは、いかなる人にてあるやらん。かれこそ御分たちの一門、伊東のぬし工藤左衛門祐經よ。御分の父河津殿とは従弟なり。御前さらぬきりもの。とぞ教へける。

さてはそれにてありけるよ。このこと思ひ寄らでいふやらん。知りぬれども何事かあらんと、思ひこなしていふやらんと、いつしか

胸うち騒ぎけれど、思ひ寄りざるさまにて、このものはよきをのこにてありけるや。三十二三にぞなるらん。みづからが父にや似たる。と問ふ。少しも似給はず。まさしき兄弟さへ似たるは少し。まして從弟に似たるものはなし。年こそ河津殿の討たれ給ひしほどなれ。その人のましまさば、四十餘りにてあるべし。これより遙かに丈高く骨太くして、前より見れば胸そり、後より見ればうつぶき、脇より見れば四角なる大の男にてましまししが、馬の上、かちだち並ぶ人なし。殊にし、の上手にて、力の強きこと四五個國にはならびなき大力なり。されば相模の國の住人、大庭(一)の三郎が弟、股野の五郎景久とて相撲に負けざる大力を、伊豆の奥野の狩場(二)にて、片手を放ちてすまふに、三番勝ちてこそ、いとど名を揚げ給ひしが、それを最後にて、歸りざまに敢なく討たれ給ひき。大力と申せども、死の途には力及ばず。とぞ語りける。箱王は父が昔をつくづくと聽きて、今更なる心

(一)大庭景親。
(二)天城山の麓。狩場

地して、忍びの涙に咽せびけり。

やゝありて、我このあひだ祈りし願のかなふにこそあるべけれ。窺ひ寄りて、便宜よくば一刀刺し、いかにもならんと思ひ定めて、御坊はこれにましませ。法師こそ寄らね、わらんべは近く寄りても苦しからず。山寺に住めばとて、人を見知らぬはむげなり。近く寄りて見知らん。とて、赤地の錦にて柄鞆卷きたる守刀を脇にさし隠し、大衆の中をぬけ出でて、祐經がうしろ近くぞ狙ひ寄りける。祐經もしばしの冥加やありけん、梶原三郎兵衛を隔てて、箱王を見つけて、これなるわらんべは、まなこざし河津の三郎に似たるものかな。誠やこの御山には、伊東が孫のありと聞けば、若しこれにてやあるらんと、目を放さずまぼりければ、さうなく寄りざりけり。

祐經なほよくよく見れば、まなこの見返し、顔だましひ、少しも違ふところなし。祐經は念誦はてて後大衆の中へ立入つて、伊東入道

むげ

冥加

まほる

念誦

が孫この御山に候と聞く。いづくの坊に候ふぞや。名をば何と申すぞ。と問ひければ、或僧申すやう、御名をば箱王殿と申して、別當の坊にましまし候。この頃は里に候ふか。これに候ふか。と問ひければ、これにこそ。とて、東西を見めぐらし、長絹の直垂に、松に藤を縫うて、萌黄の絲にて菊綴して、こなた向に立ち給ふこそ。と教へけり。さればこそと思ひ、もとの座に歸り、箱王を招きければ、願ふところと喜びて、祐經が膝近く寄添ひけり。左の手にて箱王が肩を抑へ、右の手にて髪を搔撫でて、あつほれ父に似給ふものかな。今まで見奉らざるこの本意なさまよ。わ殿は河津殿の子息と聞くは眞か。兄は男になり給ふか。曾我の太郎はいとほしくあたり奉るか。知らざるもの、馴々しくかやうに申すとばし思ひ給ふな。御分の父河津殿とは從兄弟なり。殿ばらにも親しきものとは祐經ばかりなり。見奉れば昔の思ひ出でられて、今更あはれに存ずるぞ。急ぎ法師になり、別當

につき給へ。弟子多しといふとも、祐經ほどの方人もちたる人あり。便宜をもつて上さまへもよきやうに申し、寺門の訴訟あらば申し達すべし。今より後はいかなる大事なりとも、心をおかず仰せられよ。かなへて奉るべし。わ殿の兄にもかやうに申すと傳へ給へ。父にも添はで、いかに便なくましますらん。むかばき、乘馬などの用の時は承るべし。身貧にして他人に交らんよりは、親しければ常に訪ひ給へ。まことや古き語に、貴きは賤しきが嫉み、智者をば愚人が憎む。罪障は千載に消えず、報は千劫に絶えずと申し傳へたり。さても見參の初に、をりふし引出物こそなけれ。また空しからんも無念なり。これをとて、懷より赤木の柄に胴金入つたる刀一腰取出し、箱王にこそ取らせけれ。何となく受取れども、箱王は涙に咽せびけり。便宜よくば一刀刺さんと思へども、目を放さず、その上、大の男の常に肩に手を置きければ、なまじひなる事をし。いでして、こがひな取ら

引出物

率爾

れ人に笑はれじと、思ひ止りぬ。たゞいふこととは、さん候。」とばかりなり。率爾の見參こそ所存の外なれ。さりながら喜び入り存候。里下りの序には、わ殿の兄十郎殿とうち連れて來り候へ。返す返す。」といひて立ちにけり。箱王力及ばず止りぬ。

— 曾我物語 —

一四 陣屋問答 その一 森 鷗 外

將軍家の屋形。垂簾。簾の下には諸大名左右二列に坐す。中央前景に狩野介宗茂、新開荒二郎忠氏ゐる。

第一の 大名 最早辰の刻になつてござる。犯人を預つた大見の小平太はどういたいたやら。第二の大名に固より曾我の殿ばらは、奸盜山賊の類でもござらぬに、笑止にも繩附になり申した。

第二の 大名 情ない儀でござる。よしや御假屋を汚したとて、討つた工藤は父の仇ゆるゑ、申し宥める途もござらう。御屋形の御座所近く推

推參



谷口香崎集

曾我兄弟

参りたいたと申すからは、罪科は所詮逃れますまい。

(雑色登場)

雑色 たゞ今これへ曾我の五郎を召連れて参ります。

(雑色退場五郎登場大見小平太實政繩を取る。狩野座を進む。)

狩野 曾我の五郎承れ。たゞ今これへ召されたは、某と新開とが承つて、夜討の宿意を尋ねるためぢや。さあ逐一に申し立てい。

五郎怒る) 黙れ、狩野の介、祖父伊東の次郎祐親が將軍家と不和の爲、自滅に及んでこの方、久しく落魄いたいてをるが、某とても遠祖左大臣藤原の武智鷹が流を酌む由緒ある身分ぢや。申すほどのことはぢきに申さう。若しそれがかなはぬなら、何事も申すまい。

狩野 怪しかることぢや。某は君命によつて尋ねる。

新開 それをかれこれ申すのは、犯人の身となつても、まだ君にたてつく所存か。

宿意

落魄

頼朝の聲(簾の内より) いや待て狩野、新開。曾我の五郎が申す條尤もなれば、頼朝親ら聽いてつかはす。

(簾を半ば捲く。頼朝登場。舍人二人、近臣二人隨ふ。狩野退く。新開中央に残る。)

五郎(新開に) そこをのいてもらはう。これよりもの申すに、わ殿がそれにおゐては、わ殿にものいふに似て快うない。

將軍 新開のいてつかはせ。

新開 はあ。

(新開退く。)

將軍 見れば昨夜の雨にその土は濕つてをる。誰かある。曾我の五郎に敷革を取らせい。

卒 はあ。

(卒右手より敷革を持出で敷く。)

五郎(感激す)

この敷革を見るにつけ、
十年の昔ぞしのばるゝ。

目見
讒舌を揮ふ

年頃六波羅に勤仕して、平相國親子の覺めでたく、名利の爲に訴訟を構へ、怨毒によつて殘害を行つた小賢しき敵工藤が、時勢の移り變るに乗じて、宇佐美殿によつて御目見を賜はり、伊東の莊を拜領し、なほそれにも飽足らいで、我々兄弟を殺さうと讒舌を揮つた爲、

兄一萬は十三歳、

この箱王は十の時、

由比が濱邊に伴なはれ、

引据ゑられし敷革は、

夢見ごちに春を待つ

つぼみを摧く悲涙の座。

今は首尾好く父の仇、工藤を討つて怨をはらし、この世に思ひ置く

ことなければ、

最期を急ぐ我が爲に、

この一枚ひとひらの敷革は、

父に見えん彼の岸に、

渡す弘誓の舟いかだ。

有難く拜領いたす。(歎く)

將軍 殊勝な覺悟ぢや。然らば親ら尋ねるが、このたび工藤を討取つたのは年頃の企か、但しは俄の思立か。

五郎 それは申すまでもないこと。我等が父を討たれたは十七年の昔。兄は五歳、某は三歳、しかと意趣をも存ぜんだが、兄が九つ、某が七つになつても、もの心を辨へてからこの方は、片時忘れぬ復讐でござる。

將軍 然らば伊豆にある工藤が、十年の久しい間、月に四五たび乃

弘誓の舟いか
だ

もの心を辨ふ

衆寡敵せず

麾下

至十たびも鎌倉へ通うたに、なぜ途中では討たなんだ。

五郎 いかにもその往返には心を附け、足柄、箱根、大磯、小磯、由比、小坪のあたりに佇み、兄弟つけ狙うたが、身分ある彼が同勢、多き時は百騎に餘り、少き時も五六十騎、衆寡敵せず控へ申した。

將軍 ふん、さもあらう。さて工藤は父の仇ゆる仔細ないが、多くの麾下の侍をば、何故妄りに傷つけた。

五郎 固より我等兄弟は、かゝる狼藉を企てたからは、及向ふものあらん限り、千萬騎をも切摩けうと存じたが、我等が名告る聲を聞いて、足の立ち所も知らず逃行くゆる、後日の爲に一太刀づつ、印を附けたまででござる。

將軍 して大藤内はなぜ討つた。

五郎 あれは笑止なものでござつた。恩ある工藤に助太刀もせず、廣言を申したゆる、切捨はいたいたが、所領安堵を喜んで下國する

途中、報謝の爲に引返したは、せめてもの心掛、今はなかなか不便に存ずる。

將軍 神妙な詞ぢや。ぢやがそれほど義理を辨へたそちが、すでに敵を討つた上、なぜ余が座所に踏みこんだ。

五郎 これは憚ある申條かは存ぜぬが、流人となられた將軍家の御爲には、祖父伊東の次郎は東道の主人ではござらぬか。それが成行とは申しながら、三浦殿に預けられて自滅いたいた。また敵工藤は格外の御引立を蒙つた。これ等の遺恨なきにあらねば、一太刀おうらみ申した上で、自害いたす覺悟でござつた。

將軍 おう、よう隠さずに申したぞ。このたびの企を前以て存じてをつた同志のもの、乃至手引のものがあらう。事の序にそれも申せ。五郎 さやうなもの、一人もござらぬ。將軍 さはいへ、母にはうち明けたであらうな。

東道の主人

五郎 こは仰とも存ぜぬ。鳥獸も子をば思ふ。二人の子供に死にに往けと申す親のござらうか。

將軍 おう、一族否運に陥つたそちたちが申條としては、一々尤も至極に存ずる。仁田の四郎はをらぬか。

仁田の聲(上手背後にて) はあ、四郎忠常たゞ今それへ。

(仁田首桶を持ち登壇)

一五 陣屋問答 その二

仁田 仰によつて曾我の十郎が首級、これに持参いたいてござる。將軍 五郎、兄にあはせてつかはすぞ。いましめ解け。

(大見、五郎の繩を解く。)

仁田 實驗の上申し請ひ、わ殿に見せる十郎が首級ぢや。いざ對面いたされい。

不覺

(首桶を開く。)

五郎 懐かしや兄上。

點し列ねし松の火の、

消えなばともにと思ひしに、

不覺を取つて縛められ、口惜しくもながらへ申す。さるにても兄上、
どうしてお討たれなされたか。よし仁田殿は猛くとも、時致だに居
合はせたら。

仁田 いや、わ殿の助太刀までもない。十郎が鋭き太刀風に、某は切
りまくられ、右の肘と小鬢とに、薄手をさへ負うたれど、十郎が運拙
く、我が薙刀に拂はれて、又はほつきと鏝元から。

五郎 なに、兄上の太刀が折れたとか。なぜ我が太刀を兄上には佩
かせなんだか。

仁田 おう、その悔み道理至極ぢや。某とても一門の十郎ゆる、首討

つ所存はなかつたが、引かうといつた某を、十郎みづから呼止めて、
首を我が手に授けたのぢや。

五郎 さてはよしみある御身が手に、兄上好んで掛られたか。

(五郎歎く。犬房丸鞭を持ち走り出づ。)

犬房 父上の敵、思ひ知れ。

(五郎を鞭うつ。)

五郎 や、この小童こわらは何者ぢや。

(五郎睨む。犬房たじろく。)

仁田 犬房丸、御前ぢやぞ。

五郎 なに、犬房丸が御身か。

彼も人の子、幼くて

親を討たれし悲みは、

いかでか我に異ならん。

果報の繩に引かれずば、
刃を取りて立向かひ、
御身に討たれん我が身なり。

刑場の土になるわしぢや。せめてもの心やりしんやりに、さあその笞しちで打つてくれい。

犬房 父上を討つたお前は強い人ぢやと思つたに、優しいことをいうて下さる。それではどうも打たれませぬ。

五郎 おう、さうか。さあ、につくい小童。打たれるなら打つて見い。
犬房 なんの打たいで。おのれが。おのれが。

(連打す。)

將軍 もうよいよい。犬房それで堪忍いたせ。

犬房 はつ。(鞭を捨てて平伏す。)

將軍 五郎この上問ふべきこともないが、頼朝こんせう閨外こんがいの職を辱うし

閨外の職

て、勇士猛卒を惜しむこと何物にも譬へられぬ。どうぢや、志を翻して、奉公いたしくれまいか。

五郎 それは存じも寄らぬこと。若し處刑を宥められて、行住心に任せるなら、某は犬房にこの素首すかぶを取らせ申さう。犬房が討たいでも、

近き恵にかへられぬ

遠き恨のまつはれば、

いつ謀叛人にならうも知れぬ。一緒に死なうと誓うた兄を、久しう待たせるも心苦しい。首刎ねられるを待つ外ござらぬ。(大見にさあ、繩を打たれい。)

大見 いや、某は五郎丸が掛けたまゝの御身の繩を、君命によつて預り、また君命によつてほどいたばかりぢや。御身に繩打つすべを知らぬ。

志奪ふべから

拜領

將軍 待て、勇士を失ふは遺恨ながら、その志は奪ふべからず。五郎が繩は頼朝が、手づから打つてつかはさう。

五郎居直る。こは思ひも掛けぬ、仰ぢや。今生の思出に、さあ、御繩を拜領いたさう。

將軍起つ。我が打つ繩は不動の羅索、難伏のそちにはふさはしからう。いでいで。(階を降らんとす。幕)

— 高瀬舟 —

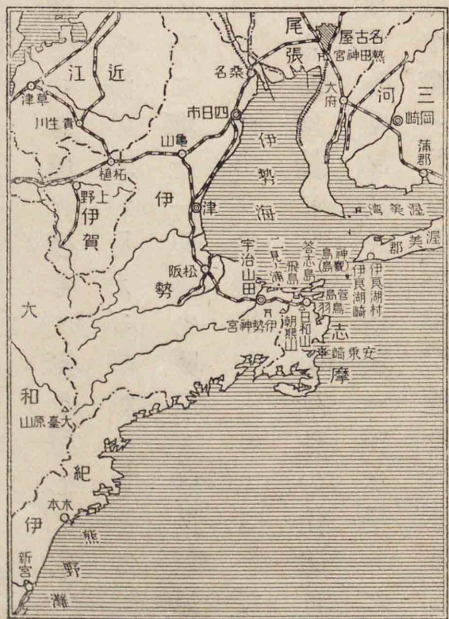
一六 伊勢志摩の海 田山花袋

南歐の風光、地中海の大觀を見馴れた西洋人でも、日本の海岸美には一驚を喫せずにはゐられないさうだ。その日本の沿海の美、その美の最も遺憾なく發揮されてある所は決して少くあるまいが、自分の見た中では、伊勢の海からかけて志摩、紀伊の沿岸に如く所はない。優美に傾かず、淒涼に過ぎず、さりとして甚だ平凡に陥らず、港

灣相接し、島嶼相連なり、斷江荒磯、漁村、蟹戸、燈臺もあれば松原もある。海水が深く陸に入つて、恰も溪流のやうな入江をなすかと思へば、月光が閃々として千里の海上を照らし、斜に欹つた一帆の片影の遠く雲外に消える光景など、殆ど應接に暇がないといつてもよい。

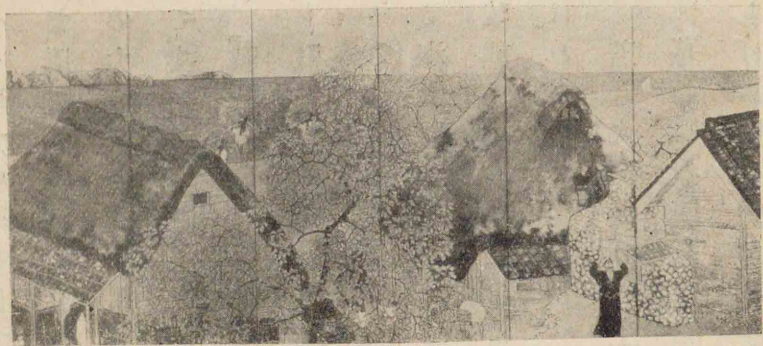
伊勢志摩の海、いかに變化に富み、明暗に富み、空想に富んでゐることだらう。自分は

嘗て三河國の最南端渥美郡の一角、伊良湖村の絶端なる古山といふ山の上に立つて、一眸の下に伊勢志摩の海を見わたしたことがあつた。夏だつたが、日は一時間ほど前に、遠く向ふにうちわたされ



た伊勢朝熊連山の陰に落ちて、一時美しく西の空を彩つてゐた種
種な形や種々な色のおもしろい夕べの雲も、いつ消え行くともな
く消えはてて、もう薄暗い夕暮の光が、どこともなく暗碧な波の上
に寄せてゐた。

見わたす限り舟といふ舟、帆といふ帆は残らず影を隠して、たゞ
海のところどころに白く碎ける波の頭が見えるばかりで、その寂
しさといつたらなかつた。左の方に、海上一里許を隔てて神島が見
える。ちやうど甕を倒にしたやうなので、一名甕島ともいふさうだ
が、この島は行つて見ると、なかなか風情に富んでゐる。西の山陰に
五六十戸の漁村。そこには桂光院といふ寺。その寺の一室を借りた
村役場。それからその島を廻つて東へ行くと、怒濤が天を吞まうと
するやうな絶海に臨んで、絶大な洞窟の奇観。満潮毎にその中に吞
吐する海水の響は、恰も巨人が天に向かつて叫ぶやうで、その壯觀



志摩の海 (渡邊公観筆)

はとても都人士の想像し得るところで
ない。神島の少し右方に當つて黒い黒い
大島の影、それは志摩の答志島だ。菅島、飛
島、その他、無数な大島、小島。

日は漸く暮れて、海の色は愈々黒く、その
上に浮かぶ島の影も微かに、星のまた、
き、遠海のさゝやき、遠山の姿、自分は深い
深い空想に耽つた。平和。人の世の平和と
は抑、何ぞや。自分はかう叫んだ。平和を望
む心、平和を欲する念、遂にこれ己の弱き
を表白してゐるのではあるまいか。見よ、
この自然を見よ、この大觀を。海は四方か
ら來て陸を吞まうとし、陸はこれを拒ぐ

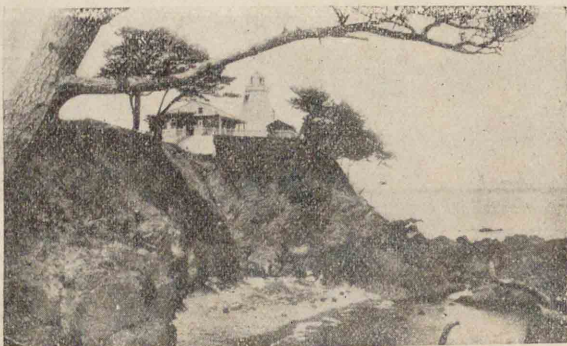
べく全力をつくしてゐるではないか。島、岩。これ等は皆陸が布置して以て海の怒濤を拒がうとする前衛ではあるまいか。けれども、海の力は時の永久な力を借りて、次第に島を崩し、岩を碎き、岸を陥れて、次第に陸の運命を縮めつゝあるのではあるまいか。

「戦闘」と自分は叫んだ。實際この伊勢の海の大觀に接すると、誰でも戦闘といふ感を起さずにはゐられまい。島と、陸と、波と、山とが、いかに互に刃を交へてゐるやうに配置されて、伊勢の内海はまるで海水に攻落されたやう。その海門を守る諸島の影は、孤城落日の状態に陥りつゝ、なほ陸の爲に節を守つて奮闘してゐるやうに思はれるのだ。

若し人が、自分の空想に耽つたやうに、その古山の一角に立つて、薄暮の影の四方に満ちわたるのも知らずにゐたならば、千鳥の寂しげに鳴く聲が、歌のやうにその耳を掠めるので、覺えずその恍惚

孤城落日

(一)志摩郡安乗崎。



安乗の燈臺

志摩國安乗の廻轉燈の光である。

あゝ、この詩趣ある燈臺、自分は殆ど想像するにも堪へないのだ。

から覺めるだらう。その時は、影の低いばらばら松の間を過ぎて、外

海に面した荒磯の方へとたどり行くがよい。そして松原を出てしまつたならば、足を留めて神島と、その向ふに遠く微かに連なりわたる志摩の山脉との間を見るがよい。月の夜には、その明らかな光に紛れて、それと分明に見出すことはできないかも知れないが、闇の夜には、もの凄い波の上に、大凡一分間くらゐづつ間を隔てて、線香花火のやうにぴかつと光つて、そしてすぐ消えるものがあるだらう。それは何か。燈明崎――

(一) 志摩半島

絶海の畔、漁村を距ること數町、磯馴松が風に吹かれて、皆おもしろく斜によれてゐる半島(一)の絶端、懸崖千丈、暴風雨の荒れる夜などは、怒濤の響、松の響、海の鳴る響、風雨の吼える響、殆どその凄じい力に、吹飛ばされてしまひはせぬかと疑はれるばかりのその燈臺に、若い空想がちな青年でなければ、年老いて世の荒波に漂ひはてた老爺、それが靜かに、穩かに、世の中ではとても見ることもできない悠揚たる態度で、海に惱む船人の爲に、その夜毎の勤を怠らない寂しい生活をしてゐる。どんなに空想に乏しい人でも、これを見ては、さまざまな想像を起さずにはゐられまい。

——花袋紀行集——

一七 清 水

持統天皇

春すぎて夏きたるらし白たへの

よみぢう
たまたかへ

(一) 歌人、古今集の撰者、天慶六年(一六〇)歿

杜陽子親

杜宇墨

不世傳

鄭公

(二) 武將また歌人、治承四年(一一三四年)平家を滅さうとして敗死した、年七十七

ころもほしたり天の香具山

紀(一)貫之

なつの夜はふすかとすれば杜鵑

啼く一聲にあくるしのゝめ

蹟筆之貫紀傳

庭の面はまだかわかぬに夕立の

源(一)頼政

そらさりげなくすめる月かな

賀茂真淵

大びえや小びえの雲のめぐりきて

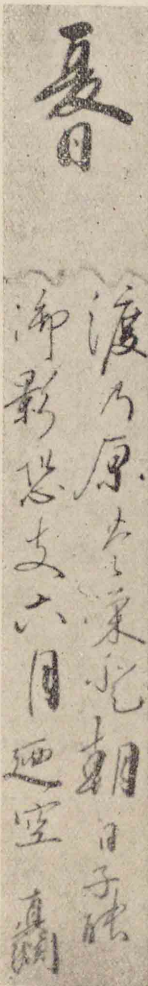
ゆふだちすなり粟津野の原

かぜそよぐならの小川の夕暮は

藤原家隆

みそぎぞ夏のしるしなりける

夏日豊祭
渡原日子の
登朝子六
御影恐き六
月空淵



賀茂真淵筆蹟

西行法師

道のべの清水ながるゝ柳かげ

しばしとてこそ立ちとまりつれ

一八 蘇州城内

芥川龍之介

孔子廟へ來たのは日暮方だった。疲れた驢馬に跨がりながら、敷石の間に草の生えた廟前の路へさしかゝると、寂しい路端の桑畑

蒼茫萬古

の上に、薄白い瑞光寺の廢塔が見える。塔の一層一層に、蔦かづらや草の茂つたのも見える。その空に點々と飛違ふこの邊に多い鵲も見える。私は實際この瞬間、蒼茫萬古の意とでも形容したい、哀にも嬉しい心持になった。

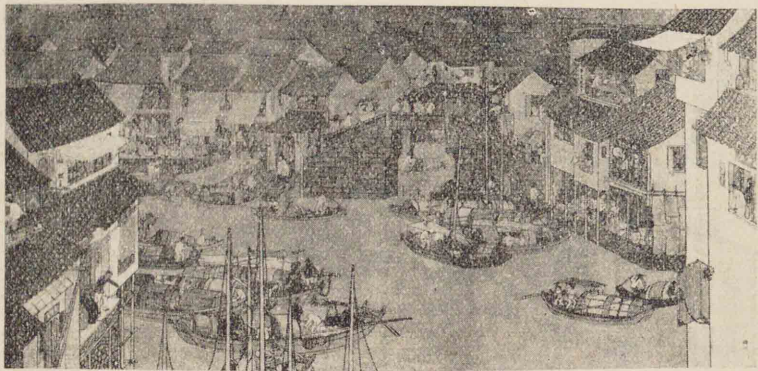
この蒼茫萬古の意は、幸にずつと裏切られなかつた。門外に驢馬を乗捨てた後、路もおぼつかない草の中を行けば、暗い柏や杉の間に、南京藻の浮かんだ池がある。と思ふと、池の縁には赤い筋の帽子の兵卒が一人、蘆や蒲を押分けながら、又手網で魚を掬つてゐる。こゝは明治七年に再建されたとはいふものの、宋の名臣范仲淹(一)が創めた江南第一の文廟である。それを思へばこの荒廢は、直ちに支那の荒廢ではないか。しかし、少くとも遠來の私には、この荒廢があれ**ばこそ、懷古の詩興も生ずるのである。私は一體歎けば好いのか、それともまた喜べば好いのか。――さういふ矛盾を感じながら、苔む**

(一)蘇州吳縣の人。
皇祐四年(西曆一〇五二年)歿、年六十四。

した石橋を渡つた時、私の口にはいつの間にか、こんな句が微かに
謳はれてゐた、休言竟是人、家國。我亦書生好感時。——但しこの句の
作者は私ではない。北京にゐる私の友人である。

黒い禮門を通り過ぎてから、石獅の間を少し歩むと、何とかいふ
小さい通用門がある。その門をあけてもらふ爲には、青服の門番の
主婦に、二十錢銀貨をやらなければならぬが、その貧しさうな主
婦が痘痕のある十許の女の子と一緒に案内に立つところは、哀で
ある。私たちは彼等の後から、どくだみの花だけほの白い、夕濕の敷
石を踏んで行つた。敷石の盡きる所には、戟門といふのだらう、大き
な門が聳えてゐる。名高い天文圖や、支那全圖の石に刻まれたのも
ここにあるが、あたりに漂つた薄明では、碑面もはつきりとは見る
ことができない。たゞ、その門をはいつた所に、太鼓や鐘が並んでゐ
る。甚だしいかな禮樂の衰へたるや。——今考へると滑稽だが、私に

(一)孔子を祭つた
殿堂。



(筆窓雪田岡) 夏 の 州 蘇

はこの埃だらけの古風な樂器を眺めた
時、何だかそんな感慨があつた。
戟門の中の石疊にも、勿論茫々と草が
伸びてゐる。石疊の両側には、昔の文官試
験場だつたといふ廊下同様な屋根續き
の前に、何本も太い銀杏がある。私たちは
門番の親子と一緒に、その石疊のつきあ
たりにある大成殿の石段を登つた。大成
殿は廟の正殿だから、規模もなかなか雄
大である。石段の龍、黄色な壁、群青に白く
殿名を書いた御筆らしい正面の額——
私は殿外を眺めまはした後、薄暗い殿内
をのぞいて見た。すると高い天井に、雨で

も降るのかと思ふくらゐ、颯々たる音がわたつてゐる。同時に何か異様な臭が、ふんど私の鼻を打つた。

「何です、あれは。」

私は早速退却しながら、同行の友を振返つた。

「蝙蝠ですよ、この天井に巢をくつてゐる。」

友はにやにや笑つてゐた。見ればなるほど敷瓦の上にも、一面に黒い糞が落ちてゐる。あの羽音を聞いた上、この夥しい糞を見れば、いかに澤山な蝙蝠が梁間の暗闇に飛んでゐるか、想ふだに餘り好い氣味はしない。私は懐古の詩境からゴヤの畫境へ突落された。かうなつては蒼茫どころではない。宛然たる怪談の世界である。

「孔子も蝙蝠には閉口でせう。」

「なに、蝠と福とは同音ですから、支那人は蝙蝠を喜ぶものです。」

驢背の客となつた後、私たちはもう夕靄の下りた暗い小道を通

(Corymb.)
畫家。スペインの
人。肖像畫に
たたくみであつた。
西曆一八七
四年(西曆一
八七四年)

(Pantelaine)
フランス人。
デカダンス派の
詩人。(西曆一
八六七年)

りながら、こんなことを話し合つた。蝙蝠は日本でも江戸時代には、氣味が悪いといふよりも、意氣なものだと思はれたらしい。しかし、西洋の影響はいつの間にか、鹽酸のやうに地金の江戸を腐らせてしまつた。して見れば今後二十年もすると、蝙蝠も出て來て濱の夕すゞみの歌には、^(一)ポードレルの感化があるなどと、述立てる批評家が出るかも知れない。——驢馬はその間も小ばしりに、頸の鈴を鳴らし鳴らし、新緑の匂の漂つた、人氣のない路を急いでゐる。

—支那遊記—

一九 西瓜と蠅

大町 桂 月

蠅憎し打たんとすれば近寄らず

蚤は蚤取薬にて防ぐべし。蚊は蚊帳にて防ぐべし。蠅を防ぐ法は未だ發明せられず。頭にたかり、足にたかり、顔にたかり、手にたかり、

(一)支那明代の人
馮夢龍の著。

鼾睡す
劈開す

うるさきこといはん方なし。

一日横臥して(一)智囊を讀む。その一節にいはく、

「維亭の張小舎、善く盜を察す。嘗て暑中に於て一古廟の中に遊ぶ。三四輩あり、地に席して鼾睡す。傍に西瓜あり、劈開して未だ食はず。張小舎指さして、盜となしてこれを擒ふ。果して然り。或人その術をたゞく答へていはく、『古廟に群睡せるは、夜勞して晝疲るゝなり。西瓜を劈いて食はざるは、蠅を避くるなり。』」

となるほど、夏日田舎道を行くに、食残しの西瓜に蠅の集れるは屢見るところなりとて、農家より西瓜を買來らしめ、これを劈いて身邊に置くに、蠅は一向これに集らず。これはどうしたることか。と考ふるまでもなし。下種の後智慧よめたり、よめたり。食物の氣なき廟畔の地面にてこそ、蠅は西瓜にたかれ、食物の氣多き室内にては、蠅が冷たき西瓜に飛付くものにあらず。これはばかな眞似をしたもの

かな。と自ら笑ふ。思慮を経ずして妄りに書物にあることを實行せんとすれば、とんでもなき間違が起るべしとて、記して自ら戒むるものなり。

——桂月全集——

蟻と地上〔自修文〕

(一) 井上康文

太陽は焼きつくやうに輝いてゐた。地面は白く乾いて、草や樹木は喘いでゐた。その時蟻は巢から出た。むつとした草いきれが彼の身體を包み、太陽がその小さい身體を焼きこがしてしまふやうに照りつけた。

蟻は巢を出る時に考へてゐた、この草深い田舎で、毎日毎日餌を漁るに汲々としてゐる自分の愚かさを。どこか自分の知らない所に、違つた世界が、もつとすばらしい世界があるに違ひないと。

そこで彼は巢を出たのだ。大きな憧憬をもつて、それが自分をより美しい世界に導くだらうと思つて、彼は歩きだした。元氣よく、快活に、草の葉を越え、土の塊を飛越え、土の盛上つた大きな山を乗越えた。そこで彼は、自分の仲間

この一篇は、己の分に安んずるに、不相應な慾望を起すのを戒めたのである。
(一)名は康治。詩人。神奈川縣十年生。
草いきれむしあついのにはび。汲々
いづしようけんめいになること。

曾ても
もとも。以前

現實相
現在の世の中。

たちが、曾て自分が働いたやうに懸命に、あくせくと働いてゐるのに出會つた。彼等はお互に頭を突合はせた。そして御辭儀をし合つた。彼等は曾ても（恐らくその時も）非常に親しかつたのだ。彼等は左に道を避合つて、永い別をした。一匹は憧憬の國へ、一匹は現實相の中へ。

だが彼は、自分の仲間と別れる時、ちよつと寂しかつた。初はそれよりも喜と、誇と、感激とで一杯であつたが、別れた瞬間、涙ぐましい氣持になつた。それで五六歩戻つた。が、それは地上に輪を描いたに過ぎなかつた。彼はまた自分の取つた道を歩き始めた。

或日、二人の旅人が道を急いで來た。そして汗を拭ひながら、背負つた荷物を下して、太い松の樹の下に休んだ。

「随分暑いですな。これでは晝間は歩けませんや。」

「ほんとに、東京は九十度からの暑さだといふことです。この邊では田も河も水が涸れて、御百姓は大分弱つてゐるやうです。」

「これぢや人間だつてたまりませんや。……時に貴方はどちらへ。」

「わたしは東京へ上ります、この街道をずっと商つて。」

「この頃ぢやあ行商も骨が折れませうな。何でも呉服物は東京の大店がうんと勉強して、どこでも誰でも、やれ、あすこのでなければいけない、ここのでなければいけないなんて、いつてゐますからな。」

「さう、ずっと世の中が變つて來ましたな。以前は私たちにも相當な商ができたのですが。何といつたつて東京でさあ、私たちがかりぢやありませんや。」

蟻はこの對話を聞いた。何でも、こんな所よりは、すばらしく大きな所のあることがわかつた。どんな所だか知らない。だが、そこへ行けば、こんな所では及ばないものが、うんとあるのだ。それはどんな所だらう。彼の好奇心は昂つた。彼はどんなにしてもその都へ行かうと決心した。

彼は長い街道を歩いてゐた。埃まみれになつて、車や馬の往來を避けながら、旅人と共に都をさして歩いてゐた。彼の頭の中は、都會の想像で一杯になつた。彼は美と善とをもつて、都會の想像を飾つた。そして自分の行く所を光榮あらしめた。

美と善と云々
都會を美と善
とある所と善
の想像し、そし
て自分の行先
をいかに光
榮のある所と
した。

(1) Asphalt.
(土瀝青) アス
ファルトを敷
詰めた街道。

路地
家と家との間
などのせまい
道。

おぼおぼしな
がら
びくびくしな
がら。
護謨の輪
は、ここでは自動
車の車の輪を
いふ。

それから數十日の後、彼は都會の眞只中^{まことなか}にあつた。凄じい音をたてて、自動車や電車が^{ゆきか}行交つた。人間が絶間なく飛歩いてゐた。そこには敷詰めた⁽¹⁾アスファルトの街道が走つてゐた。路傍には一本の草の葉さへも見られなかつた。金や銀の金屬がまぶしいやうに光つて、人間がそれを奪ひ合つてゐた。だが、彼の食物はなかつた。輝いた金も銀も、彼には食物ではないと思はれた。そんなものがおれに何の役に立つのだ。彼は^{いきどほり}憤を感じた。街の家は軒を並べて群立してゐた。そこから汚れた息が吐出されて、空に流れた。人間の顔は青く、生白^{なましろ}かつた。赤銅色の素^すつ裸^{はだか}な人間は一人もゐなかつた。そして暑さはどこの路地にもはいりこんでゐた。「暑い。暑い。」といひながら、綺麗に装^{まは}つて、人間はどこにも出歩いてゐた。彼は眼が廻りさうになつた。「こんな所に自分等の食物があるのだらうか。」心配でならなかつた。

彼はおぼおぼしながら、少し歩いて見た。すると自分と同じやうに、恐れ戦^{おそ}いてゐる一匹の蟻に出逢つた。彼も顔を眞青^{まことあざ}にして、ふるへてゐた。ぐうんと地響^{ぢひびき}を立てて、太い護謨の輪が彼のそばを走つて行つた。身體がす

くんで、歩けさうにもなかつた。彼はそれでも血眼になつて、食糧を探し始めた。だが、一切の蟲の羽さへなかつた。夜になると、家の中を飛出してくる人間で、街道がうづまるやうになつた。濁つた光が道を照らした。彼はじつと身を縮めて、時の過ぎるのを待つた。

そのうち物音が靜かになり、人通^{ひととほり}が絶えて來た。電車が走らなくなつて、時自動車^{自動車}がすばらしい勢でかけぬける外、靜かになつて行つた。彼はそろそろ歩きだした。「こんな所はとても堪^たらない。ぐづぐづしてゐると命がない。」彼は街に面した或⁽¹⁾カフェーの壁を攀^{よぢ}登り始めた。そして三階のベランダ⁽²⁾に上つた。ベランダには一つの鉢が置いてあつて、護謨の木が植ゑてあつた。彼はその鉢の土の上で足をぐつと伸した。救はれた、救はれたと思つた。懐かしい、快い土の觸感が身に迫つた。木の匂が身體に浸みこんで來た。だが、田舎の草の根に巢をもつてゐた時ほど、自分の活動の場所が廣くないのが悲しかった。

夜の露や夏蟲の鳴聲が、彼を慰めてくれなくなつた。青い空もめつたに見ることができないし、狂ひ廻つて搜しても、一匹の蟲を見つけるのは容易ではな

(1) Cafee.
コーヒー店。
(2) Veranda.
えんがは。

觸感
ふれた感じ。

くなつた。

彼はそれから、カフェーのベランダに置かれた護謨の木の下に巢を造つた。世の中は騒々しいばかりで、彼には毎日退屈な日が續いてゐた。―井上康文詩集―

二〇 「日本だ」

島崎 藤村

黒潮に乗つて、私は一晝夜に三百二十海里の餘を歸つて來た。故國は今どんな風に變りつゝあるだらう。これからさきどんな風に變つて行くだらう。もう一度自分が故國を見得る日は、どんな風に變つてゐるだらう。かうした想像は過ぐる三年の間、自分から離れなかつた。若し幸に無事で故國にたどり着くことができたなら、日頃親しい人々の恙ない顔を見て、思ふさま國の言葉を話さう、あのことも聞いて見よう、このことも聞いて見ようと、さまざまに思ひ設けて來た。その故國の方へ、私は漸く近づきつゝあつた時だ、私の乗

(一)大正二年に渡歐して大正五年の秋歸朝した。

(一)Singapore. (新嘉坡) マレー半島の南端にある都市。
(二)支那廣東省。イギリスの直轄植民地。

(三)Durban. 英領南アフリカのナタルの港。

つて來た汽船熱田丸は、やがて九州の南端に近い海上まで歸つて來た。そこまで歸つてくると、大隅群島の一部が見えるといふ聲を聞いた。日本だ。一緒に乗合はせて來た人々は、いづれも甲板に集つて、七月の日に光る海の彼方に、遠く顯れた島々の影を望んだ。シンガポール、香港、上海と寄航するたびに、私たちの熱田丸では内外の乗客を加へたから、その時甲板に集つて、互に歡喜を分つた男女の數は可なりにあつた。しかし、ロンドン出發以來五十餘日の長い航海の後で、或時は南アフリカのダーバンからシンガポールに至るまで殆ど陸を見ることなしに、毎日毎日海ばかり眺め暮して來たやうな、さういふ極少數な乗客のみが、眞にその場合の歡喜を分ち合つた。そして私もまたその一人であつたのだ。恰も日光の渴きを激しく感ずるものが、争つて日の出を望まうとするやうに、私たちもまた激しい陸の饑から救はれようとした。

しかし、これは陸の饑ばかりでもない。私にとつては故國の饑だ。少くとも私の思郷の念は、あの長期の航海を續ける船乗などの心に似たものであつた。陸の上に倒れ伏し、懐かしい土に吸ひつきたいとさへ思ふといふ船乗の心は、全く自分の同感し得るところであつた。私はこんなことさへ胸に描いて歸つて來た。若し上陸して出會ふ最初の日本人があつたなら、知る知らぬに拘らず、その人の側に走り寄らう。でき得ることなら、堅くその人を抱締めよう。そして自分は遠い國の方から歸つて來たものであるといふその心を告げようと。……實際私は戯れてゐるのではなかつた。それほど人懐かしい心をもつて歸つて來た。

私は熱田丸の甲板の上から、土佐の室戸崎^(一)を望んだ。所謂「お鼻」といふ所だ。二十三年前高知に舊友を訪ねようとして、ひどく波濤に揺られた記憶のある所だ。私はまた紀伊の沿岸を望み、淡路島を望

(一)高知縣安藝郡の最南端。

(一)Asia.
(亞細亞)

んで來た。翠色の滴るやうな日本の島影は、アジヤの他の地方に比べて、どれほどその趣を異にしてゐるか、今度の航海はそれを語つた。

水夫等よ、錨を用意せよ、港は近づいたぞ。七月三日の夜のことであつた。私たちの熱田丸は、客船といふよりも、貨物船といふべきほどで——實際、この戦時に際して、貨物船でない定期船があらうか——イギリスから積んで來た多量な鐵材をはじめ、マレー半島^(二)からも、支那からも積んで來た種々な荷物を船庫に満載しつゝ、豫定の時刻に遅れまいとして、神戸をさして急いで來た。

その時はもう、遠くちらちら燈火が見えた。いかに遅くならうとも、神戸に着くまでは眠るまい、皆起きてゐよう。かう人々は互にひ合はせた。ほの暗い電燈に照らされる甲板の上には、たゞ上陸を待ちわびる心のみがあつた。私も甲板の欄近く行つて、遠く暗い海

(二)Malay.
アジヤ洲最南端の半島。

(一)兵庫縣(播磨國)明石市。

の彼方に、點々とした美しい燈火の輝きを望んだ。あれが神戸だらうか。「いや、あれは明石だ。」と傍に立つて教へてくれる船員がある。次第にその光は輝きを増して來た。數をも増して來た。かしこにも、ここにもといふやうになつた。闇に隠れた山の容は見えないまでも、高い傾斜らしい所に續く燈火があり、港に満ちた燈火があり、海岸には海岸らしくそれと知得る燈火の列が、水に接して並び輝くあたりは、そこがもう神戸であつた。

(二)神戸市の南方。檢疫

(一) 和田岬の燈臺近く私たちの船が到着した頃は、夜の十一時過であつたから、規則通りの檢疫を受ける爲には、翌朝まで待たなければならなかつた。愈、一夜は沖合に碇泊することとしまつた。海上の闇を縫うて、幾つとなく燈臺の陰を流れ過ぎる火の鴛鴦のやうなのは、あれは漁に出かける船だと心づくにつけても、漁船を見ることの多い日本近海の魚族の豊富さが思ひやられる。この一夜の碇



神戸 港 前田 森 都 筆

泊は、日中の入港にも勝つて、全く好い印象を興へた。假に私が晝日
中着いたとしたら、なるほど神戸附近の山々の容はよく見えたら
う。海岸の旅館、その他多くの建築物、鐵骨の顯れた船渠などはよく
見えたらう。多くの汽船と、帆柱と、煙筒と、旗と、赤く塗られた新造中
の船と、その間を動くランチ、日本風の荷船、小舟はしげなどの、ごち
やごちやとした港の光景はよく見えたらう。しかし、さういふ煩は
しい細目の外に、何物が私の記憶に残つたらうか。夜は違ふ。ほんと
に、そこには何物もないやうで、何もかもあつた。日中に感じ得られ
たらうと思ふよりは、より以上のものがあつた。星のある七月の空
は殆ど水と抱合つて、廣大無邊な暗夜の實在を感知せしめるのは、
かういふ晩だ。天涯萬里といふ言葉を、そのまゝ當てはめ得るやう
な遠い旅路の末に、東方の果の果なる故國の入口へと漸くたどり
着いたことを感知せしめるのも、かういふ晩だ。

— 藤村讀本 —

Launch

二一 銀砂滿天

河井 醉 茗

天上の砂は星である。地上の砂はこぼれ易いが、天上の砂はこぼれない。

深夜の空に金の砂子、銀の砂子を撒散らしたやうな星の数は、地上の砂よりも多いであらう。

恒河の砂は無敵であると聞くが、銀河の砂も無限だ。幾光年か知れない星が天に充ち満ちて、その一粒の砂には、また私たちの住む地上の砂よりも多くの砂を含んでゐるかも知れない。

光年
〔詩人。東京の
人。明治二十
五年生。〕

「私に一々名を呼ばせてくれ、おゝ風に輝く星々よ。」と星の詩人尾崎喜八氏の呼びかけたのは、武藏野の真中である。

我が砂丘の上に輝く星々の数も、武藏野の真中の空に輝く星々と同じく数が多い。その悉くの星が今夜現れたかの如く、新鮮な光

輝に輝いてゐる。

都會の空に輝く星の数は極めて少い。空氣が混濁してゐるからだ。原野、山嶺、海岸、遠洋、それ等の場所で空の無量海を測るなら、あらゆる星が悦ぶだらう。

我が砂丘の上にも、宇宙の旅人は無敵に廻つてゐるのだ。名を知らないけれど、私もその一つ一つに呼びかけて見たい。

地上の砂には手がとゞくけれど、天上の砂は手に觸れられない。たゞ距離の存在を知るばかりだ。それでも私たちは夜空の美しさを、幾たびか仰向いて見るだらう。

ここに生活するものが仰ぐ星だ。我が砂丘の夜は暗いけれど、星は美しい。美しい夢想を意識したいのも人間の希ひだ。星を忘れてゐるやうな人間は寂しさを知らない。暮れたばかりの都會の一角、赤い灯、青い灯、イルミネーションの色、黄色い霧が立つてゐる。星の

〔Illumination
(照明)〕

輝いてゐることなどは誰も知らない。」と嘗て私の詩にあつた。

—生ける風景—

二二 戸隠登山

荻原井泉水

翌朝顔を洗ふとて水に手を入れると、指が切れさうな清水だつた。木で作つた大きな昔風の手洗だらひで。

宿の前に出て見る。そこら一面の露だ。麻畑でも、桑畑でも、叢でも、藁屋でも、犬でも、馬でも……。

向ふに戸隠に續く西山が見える。戸隠によく似たジッグザッグな峰の連立した山で、ちやうどそこに朝日がさしかけたところだ。屋根が深い襷をなしてゐるので、光の當る表に緑が燃立ち、その裏の谷間が眞黒にくつきりと刻みこまれてゐる美しさ。そのすぐ左に遠く見える白馬嶽(二)の積雪が、ほんのりと薄赤く染まつて行く美

(1) Zigzag.

(二) 戸隠山の西方
約八里。海拔
二九三三米。

しさ。——登山の幸を約束するやうな、すばらしい好晴だ。

きのふ呼んだ案内者が、山國通有な無表情な顔を、少しにこにこさせながらやつて来て、外に立つてゐる私に、「お早うございます。」といふ。雪袴を穿いて、腰に木の鞘にはめた小刀をさして、何といふか知らぬ、もつこのやうな厚い蓆に紐を附けたものを背にしてゐる。これにけふの握飯や草鞋などをつけて、負うてくれる氣なのだらう。人の好きさうなおやぢだ。

(3) Slack.

そろり、そろりと出かけた。暫くは流に沿うた路に(一)ステッキを振りながら、散歩でもするやうなゆつたりとした氣持で。露がべつとりと深い。桔梗や野菊は露が重たくて、臉が開かれないといふ風をしてゐる。

ゆふべ月を見て立つてゐたあたりには、唐松が疎に生えてゐる。この木の楚々とした高原的な感じは懐かしい。それから先へ行く

と、景色が開けて、白樺があちこちに立つてゐる。をりから朝日が原の上を洪水のやうに漲り寄せて、その華やかな光線が、樺の艶やかな木肌にきらきらと反射する。鶯があちらで、またこちらで、好い機嫌に鳴いてゐる。

飯綱山(一)がこんもりとして右手に迫つてゐる。そしてこれから登らうとする戸隠が、高く峻しい姿を以て、びつたりと行手に立現れて來た。ちよつと勇み立たれるやうな氣持になる。

奥社(二)の入口から十數町、眞直に杉並木が續いてゐる所はすばらしい。この木立の下が坦々として參道になつてゐる。杜鵑がけざやかに鳴く、ほぞんかけたか。ほぞんかけたか。それから山鳩が「ぼうるん。ぼうるん。」と、昔はここに十數棟の寺屋敷があつたものだ。と案内者がいふ。なるほど大きな礎が雑草の中に残つてゐる。雑草の一つに、露のやうな葉で、どの葉もどの葉も蝕んだやうな穴のあいて

(一)長野縣上水内郡。戸隠山の東南約三里。米海抜一九一七。

(二)戸隠神社。

ゐるのがあつた。何といふ草だと尋ねると、何といふのがほんたうか知らぬが、俗に、やぶれがさといふと案内者は教へた。

奥社は山の麓にびつたり沿うた少し高みの所にある。規模は小さいが、幽邃なこと第一である。信州の人はよく戸隠に詣でる。さうした講も多くできてゐるさうだ。それは皆この奥社までくるのである。信心の方はそれで足りる。しかし、戸隠の雄勝を探らうとするには、是非とも裏山を踏まねばならない。これから上には水がないから……と案内者がいふので、ここの御手洗に落ちこむ清水を水筒に一杯満たした。

案内者が磨くまゝに、社務所の勝手口のやうな所にはいると、山の腹から大きな巖石が岩戸のやうになつて出つぱつて、この内で焚く炊煙に燻されて、鐵のやうに眞黒に光つてゐるのに、ちよつと驚かされる。見廻すと、社務所の柱も、天井も、塗立ての漆のやうな黒

光りがして、漆の汁が今にも滴りさうである。ここに帳面をぶら下げ、

此所ヲ通行サレル方ハカブリ物ヲ御取り下サイ 社務所とある。戸隠には天狗様が澤山ゐて恐しいさうだから、命これ従はねばならぬと豫てから聞いてゐた。帽を脱いで、この黒光りした岩戸の下を潜つて出ると、その裏からすぐに急な上りになる。

路は頂上まで殆ど一直線についてゐると見える。それはこの山がきつ立の谷で深い壁を作つてゐるので、路は谷から渡つて縫ふやうにつけることができず、一つの尾根の背にすがりついて、遮二無二上りきつてしまふより、路のつけ方がないからである。それだけ一步一步が、一步一步だけ目に見えて眼界を廣く展開する。

蟻のとわたりといふ嶮岨があるとは聞いてゐたが、それは岩石を傳うて移る所で、幅二三尺に足らぬ岩の背が、右も左も文字通り

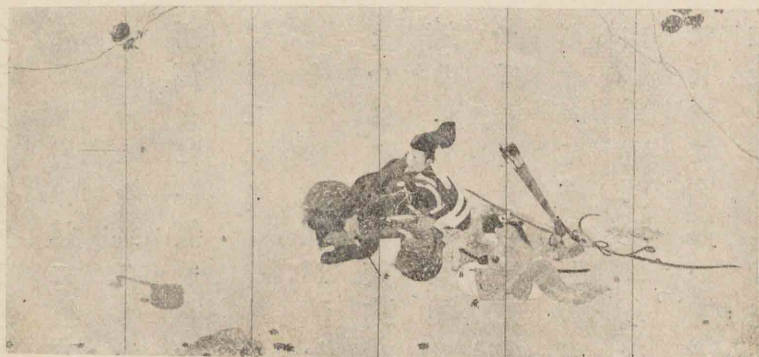
千仞

の千仞の絶壁を以て、げそりと直角的に谷になつてゐるのである。そこだけは邊に樹木も少い爲、足元の危さ、谷の深さが、一層はつきりとそこを通るものの目を脅す。これと似て劍の刃渡と稱する難所がまだ一個所ある。霧の深い日や風の強い日などには、むづかしさうである。

その試練が濟むと、むぎに絶頂である。ここの展望臺を八方睨といふ。これも天狗様の聯想からついた名であらう。いかさま八方遮るものなき景觀である。まづ北に漫々たる日本海が水平に盛上つてゐる。光の受方のせいか、光らずに薄黒くどんよりと憂鬱な感じをしてゐる。西の方には近く西嶽(一)と荒倉山(二)とが並んでゐる。荒倉山は戸隠傳説にある維茂(三)が鬼女を退治した所として、謠曲「紅葉狩」によつて名高いアルプスの連峰はここから見て更にその結構の雄大に驚かれる中に、白馬の雄姿が愈、輝いてゐる。北東から東にか

(一) 戸隠山の西南方。海拔二〇三五米。
(二) 戸隠山の南方。海拔一四二二米。
(三) 平維茂。平貞盛の養子。平貞Alps.

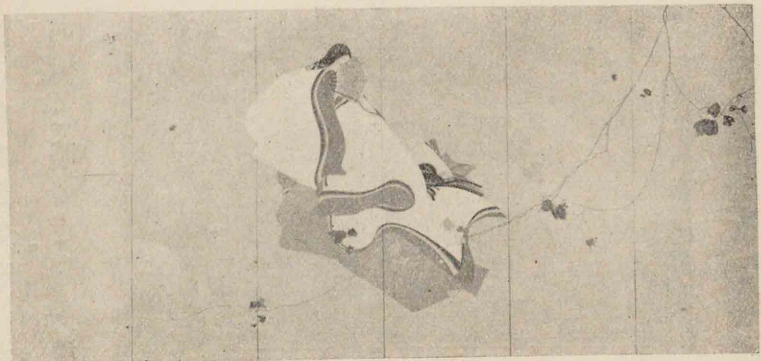
(一)新潟縣(越後國中頸城郡。長野縣との境界。海拔二四四六米。
 (二)妙高山の南方。新潟縣との境界。海拔二〇五三米。
 (三)戸隠山の西北方約一里。
 (四)上水内郡。



一のそ (筆達築山小) 狩葉紅

けて妙高^(一)黒姫^(二)高妻^(三)飯綱の群山が峙つてゐる。この高妻は戸隠の奥山とされてゐるもので、きのふ山上の小屋に泊らうと考へてゐた小屋といふのは、高妻の頂上にあるといふことだ。地上に低く銀色に圓く光つてゐるのは野尻湖だ。それから南に寄つて遠くうねうねと白く光つてゐるのは千曲川だ。南には淺間山から上州、武州、甲州にかけての連峰、——お、富士が見える。富士が……によつほりその紛れない頭をぬき出してゐる。

八方睨は戸隠山の西端である。そこから山の背を傳うて東端に移るのだ。この



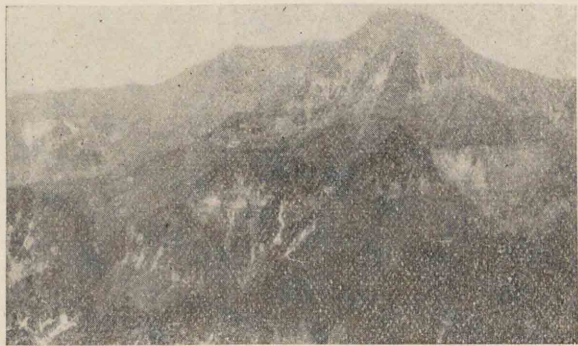
二のそ (筆達築山小) 狩葉紅

峰渡は上り下りが少い。ここらにも木立は深いので、行くには樂である。そして右に左に展げる眺がおもしろいし、吹通す風がすばらしく涼しい。龍の谷、岩戸の谷、大科の谷、白澤、塔の澤、燒の澤などと深い谷や澤が、天然の大きな斧の力を思はせるやうに、ぎつくりと刻みこまれてゐる。その縁邊に沿うて馬の背のやうな路を行くのだ。

木立が深い爲に高山の感じに乏しい。また展望が開けてゐる爲に深山の感じに乏しい。小鳥の数が非常に多い。その中でも鶯は騒々しいほど鳴く。川原ひわが

〔一〕茅簷相對坐
終日。一鳥不
鳴山更幽。
〔王安石〕

よく囀る。一鳥啼かず山更に幽なり。といふ句があるが、かう鳥が賑やかに鳴くことも、深山といふ感じとは遠い。しかし、谷を見ると、絶



壁に沿うて高山植物がびつしり咲いたり、小さいお花畑になつてゐる所もある。そんな所に蝶がひらひらと懸崖にすがりつくやうに飛んでゐる。

高 妻 山

天狗の話も聞かされた。この山に来て天狗の不思議を嘲る話などをすると、忽ち天狗の怒に觸れる。今までそよとの風もなかつたのに、俄に木立が嵐のやうにざわめき立つてくることがあるさうな。また夜はをりをり、^かんら、^かんら。と大きな音で人の笑ふやうな聲がする。それを天狗の高笑といふが、とても人間業では

できぬ高い聲ださうな。

下山路は石がごろごろして、その間に水がじくじくと流れてゐて、歩きづらい。蓋し路といふものの、山の雨水のはけ口として自然にできたものを、人が少し踏みひろげたくらゐに過ぎないのだ。けれど、何といつても下りは早い。殖林したらしい若い木の緑の清々しい林があつたり、二三步に石を飛んで渡るくらゐな幅の川があつたりして——この水源は辨當を食べた清水なのだ——やがて牧場に出た。ここから今越えて來た戸隠の峰續きが、全體くつきりと仰がれる。八方睨や、黒澤や、釋迦澤なども、一々指摘される。相應に高いなと思ふ。

牧場といふのは村で經營してゐるので、可なりに廣く、實に天成の牧場ともいふべき地勢を利用して、牛や馬を放牧してゐるのだ。馬の一群の遊んでゐるのが遠くに見える。馬が越えないやうに柵

(一)上水内郡柏原村。

をしてある所を抜ける時には、また元の通り柵をして置いて過ぎる。たつた一軒番小屋がある。そこに寄つてお茶をふるまはれた。けさ中社の宿に置いて來た荷物は、番小屋まで別の使で届けて置いてもらったので、それを受取つて、ここで案内者に別れた。柏原まで四里といふ路は、廣い平坦な、それと共に平凡な路だ。二里行つて大橋の茶屋といふのがあるが、暑さうな家なので寄らずに、また一里ほど行つて、馬子たちと一緒に葦簾茶屋に休んだ。

この茶屋に柏原發の汽車の時間表が帖つてある。それを見て、六時半の上り列車に間に合ふやうにと歩調を早めた。驛が向ふに見える頃から、黒姫と妙高とが夕日を背にして、鮮かに大きく坐つてゐる姿が、實に美しく顧られたが、今にも向ふに汽車の烟が見えさうな時間が切迫してゐるので、ひた急ぎに急いだ。そして私たちが停車場に飛びこむのと、汽車が入つてくると全く一緒だつた。

——涼味チツクタツク日記——

二二三 海洋の旅

永井 荷風

(一)長崎より南二里半。
 (二)入海のやうになつてゐる干石灘。
 (三)長崎縣(肥前國)南高來郡。

八月中旬、横濱から上海行の汽船に乗つて、神戸、門司を経て長崎に上陸し、更に山を越えて、茂木(一)の港に出で、入海を横切つて島原半島(二)に遊んだ後、歸路は同じく上海より歸航の便船を待つて、同じ海と同じ港とを過ぎて、横濱に上陸した。二週日の間、自分は海ばかりを見た。島と岬と岩と船と雲ばかりを見た。いまだに強い海洋の空氣と色彩とが、腸まで浸みわたつてゐるやうな氣持がする。

自分はどういふ理由から、夏の旅行の目的地に、殊更暑いといはれた南方の長崎を選んだのか、自分ながらも少しくその解釋に苦しむのである。自分はたゞ廣々とした大きな景色が見たかつた。自分ができるだけ遠く自分の住んでゐる世界から離れた心持になり

たかつた。この目的の爲には、汽車で内地の山間を行くよりも、船を以て海洋に泛かぶに如くはない。海は實に大きく自由である。夏の
大空に輝く強い日光、奇怪な雲の峰、洋々たる波浪、壯快な帆影、すべ
て自由にして廣大なこれ等の海洋的風景は、いかに自分の心を快
活にしてくれたであらう。

自分は海に沈む凄じい夕陽の色に酔つた。岬の岩角を噛む恐し
い波の牙を見た。緑色をした島の上に立つ眞白な燈臺を見た。山の
裾に休息してゐるあはれな漁村の屋根を見た。暗夜に舷を打つ不
知火の光を見た。水夫が叩く悲しい夜半の鐘を聞いた。異なつた人
種の旅客を見た。自分の祖國に對するそれ等の人々の批評をも聞
いた。港に入つては活氣ある波止場の生活を見た。新しいさまざま
な物音を聞いた。いろいろな船と、いろいろな國の旗とを見た。そし
て自分の見たり聞いたりしたそれ等のものは、悉く自分の心に向

(一) 毎年陰曆七月
晦日前後、九
州三角、有明
海、近海、上
現れる無数の
火。

(一) 長崎に寺の多
いのは、幕府
時代の切支丹
宗を撲滅する
策爲の結果であ
る。

かつて、この世の生存のいかに愉快であるかを歌つて聞かせるも
ののやうに思はれた。夜半人の寢靜まつた時、たゞ一人舷によつて
水を凝視すれば、「死」がいつも自分の前に展つてゐることを自覺す
るにつけ、自分は美しい星の下なるこの人生に對して、殆ど泣きた
いほど切なく鋭い愛着の念に迫られたのである。

波浪を蹴つて進んで行く汽船の機關の一呼吸する響毎に、自分
の心はその身と共に遠い未知の境に運ばれて行く。きのふも海、け
ふもまた海。そして四日目の朝に、自分は繪のやうに美しく細長い
入江の奥なる長崎に着いたのである。

長崎は京都と同じやうに、極めて綺麗なもの靜かな都であつた。
石道と、土塀と、古寺と、墓地と、大木との多い街であつた。花の多い街
であつた。樹木の葉の色は、東京などよりも一層鮮かに濃いやうに
見えた。東京の蟬とは全く違つた鳴聲の蟬が、夕立の降つてくるや

(一)キリスト教を
往時我が國で
呼んだ稱。國本
とはヨロロ
ツバのこと。

うに市中到る所の樹木に鳴いてゐた。果物を賣歩く女の呼聲が、濕氣のない晴れわたつた炎天の下に、長崎は日本からも遠く、支那からも遠く、切支丹の本國からも遠い遠い所であることを、しみじみと旅客の心に感じさせるやうに響く。この言難い遠國的な情調は、長崎の街々のはづれにある古寺の鐘の音によつて、一層深く味はひ得られるのであつた。

森閑

(二)長崎の山の手にある一街地

自分は未だ嘗て長崎に於けるやうな、軟かな美しい鐘の音を聞いたことはない。上陸した最初の日の夕方、長崎の夕風とか稱へて、烈しい炎暑の一日の後、入日と共に空氣は死んだやうに沈靜し、木の葉一枚動かない森閑とした黄昏、自分は海岸から掘割を傳はつて、外國人向の商店ばかり並んだ一條の町を過ぎ、丸山に接する大徳寺といふ高臺の休茶屋から、暮れて行く港の景色を眺めてゐた時であつた。どこからとも知れぬが、確かに二三個所から一度に撞

梵鐘
(一)長崎は一面を海に、三方は羅壇のやうな山に圍まれ、ちやうど圓形劇場の形になつてゐる。

出される梵鐘の響は、長崎の町と入海とを、ちやうど圓形劇場のやうに圓く圍む美しい丘陵に遮られ



長崎市街

うに圓く圍む美しい丘陵に遮られて、夕風の沈靜した空氣の中に、いかにも長閑に軟かく、そしていつまでも消えずに一つ所に漂つてゐる。最初に撞出された響が長く空中に漂つてゐる間に、新しく撞出される次の響が後から後からと追掛けて來て、互に相もつれ合ふのである。もつれ合ふ鐘の餘韻は、はやとつぷりと暮れはてた燈火の港を見下す自分の心に向かつて、早く俗縁を斷つて、過去の繁華を夢に見つゝ、心地よく衰頹の平和に眠つて行くこの

俗縁

餘韻

長崎に來いと、諭してくれるやうにも思はれた。

敢へて鐘の音のみではない、到る所散歩に適する市中の光景は、皆自分に向かつて、世界中でお前が身を隠すに適當な所は、支那でもなく、日本でもなく、西洋でもない。この特別な長崎ばかりだと、さゝやくやうに思はれた。幾つとも知れぬ長崎の古い寺々は、蔦まつはるその土塀と、磨滅つた石段と、傾いた樓門との形に、いひしらぬ懐かしさを示すばかりで、奈良、京都の寺院の如くに過去の權威の壓迫を感じさせない。若しこの地に過去の背景があるとすれば、それは山の手なる天主堂の壁に掛けてある油繪が示してゐるやうな、悲壯な宗教迫害史の一節か、さらずば鎖國の爲に頓挫した日本民族雄飛のはかない名残のみである。痛嘆すべきこの二つの歴史は、畿内の山河がいつも自分に向かつて消極的教訓を語るに反して、長崎の風景に、一種名狀し難い憤恨と神秘の色調とを帯びさ

(一)長崎市内大浦天主堂にある支那の油繪

せてゐるやうに思はれる。今では同じく京都のやうに悲しく廢れはててはゐるものの、なほ絶えず海と船とによつて外國の空氣が通つてゐる爲か、京都ほど暗くはない。狭くはない。支那風に彩色した輕舟は、眞青な海の上と、灰色した掘割の石垣と石橋との下を、絶えず動いてゐる。西洋人と支那人と内地人との子供は、青物市場のほとりに入亂れて遊んでゐる。いつも石の階段と敷石の坂道とを上つて行く町々の家は皆古びて、どことなく岩乗で、しかも小綺麗である。道路は極めて狭いけれども、靜かに心安く歩くことができる。車夫や物賣の相貌も非常に柔和であつた。

——荷風全集——

をみなへし〔自修文〕

生田 春 月

暑かつた日の夜の空は、清らかな碧色に澄んでゐる。

をみなへし〔自修文〕

と詠んでゐる。だが、私の感じからは、秋はまづ「草より」といひたい氣がする。風のけしきを見せるものは、深山の裾の草である。青々と眼もはるに連なつてゐる叢が波のやうに揺れて、さらさらと爽かな聲を送つて行く時、秋のおとづれをその風の音の中に聴取るのである。けれども秋のけしきは、ひとり風の音に聞かれるばかりではない、また風の色にも眺められる。稍老いた草の色が微かに風を彩るのである。

太陽が直射して、土地からは熱炎の昇る眞夏の間に、十分に伸びられるだけ伸びきつた野の草、山の草、それがいつか花をもつものは花をもち、實をもつものは實をもつてゐる。そしてその草々の中には、一本の高い高いをみなへしがあつて、その楚々たる緑の莖に黄色な花の小粒をさゝげて、ほのかに風に揺れてゐる。想ひやるさへ懐かしい秋の景色である。秋の色である。

秋は「草より」あらはれる。その草の色、草の戦ぎと共に、人の心にも秋は生まれる。

嬰兒
赤兒

楚々
しなやかなさ

優しい母の懷に嬰兒の抱かれるやうに、夏の懷に秋は乳を呑む。

x

秋は田舎にゐてもよく、都會にゐてもよい。家にゐてもよく、町を歩いてもよい。寢てゐてもよく、起きてゐてもよい。達者な人にもよく、身體の弱い人にもよい。かういふ風に惠深いものに考へられるのが、秋の季節ではなからうか。

いつの年でも秋のくるのは待遠しい。秋になつたらと、夏の暑さの間ぢゆう、したいと思ふ仕事のこと、旅のことあれこれと想ひ廻らして、待ちに待つてゐるうちに、秋はいつの間にかついでに來てゐる。

白い蚊帳の中で、夜の更けるまで心靜かに愛讀の書に親しんでゐる時、どこからかはひこんで來たこぼろぎが、その毛のやうな觸角を廻しながら、友だちでもあるかのやうに、私に近づいてくる。何の不安もなげに、つい私の手許まで入つてくる。この小さい蟲を見ると、近づいてくる秋の相が感じられる。けれども、まだかうした八月の半ばなので、十分發育しきつてゐないし、まだ鳴きもしない。嬰兒のやうにはつてゐるばかりだ。寢返のはずみにでも、潰し

てしまつてはかはいさうだと思つて、そつと摘まんで蚊帳の外へ出て、硝子戸の開かれてゐる窓から、すぐ手の届く、蔦の一杯からんでゐる板塀へと放つてやる。

小夜曲
よるの音楽。

昔浦島の子に救はれた龜は、浦島の子を龍宮へと連れて行つたといふ。私のこの夜のこほろぎは、きつと私の爲に、九月がくれば、かはいらしい小夜曲さよさくを歌つてくれるに違ひない。やがて秋が近くなると、こほろぎのはつて行く蔦の蔓は伸びるのをやめる。伸びてもその葉は極小さい。板塀から板塀に、竹垣から竹垣に繁れるだけ繁つた蔦が、ほろほろと黄ばんで落ちるのは、十月の末であらう。その時までにはできるだけの仕事をして置いて、楽しい秋の日の旅をしたいと私は考へる。をみなへしのそのまゝの姿で野邊に立つその汽車の窓からの眺さへ、ありありと眼に浮かんで、心はいかばかりそゝられることぞ。

(一) 生田春月著小品集。大正十五年東京新潮社發行。

(一) 旅ゆく一人――

二四 テニスの試合 尾崎喜八

(一) 慶應義塾大學。木詩は大正十二年十月行はれた同大學と東京高等師範學校との試合を歌つたもの。

(一) 大學の運動場で、

テニスの試合をやつてゐる。

(二) Tennis (庭球)

(二) コートのまはりは見物で一ぱい。

その長方形に密集した人垣の中で、

球が縦横にぼんぼん飛ぶ。

四人の選手が綾にみだれて、

堅く平かなコートの上を、

飛んでくる球にしたがつて前進し、後退し、

右に駆け、左に走り、

白いライン(四)の内側の世界に、

はげしい熱氣の火花を飛ばす。

Eline

夕暮に近い空氣のさわやかさ。
太陽はうしろの森の頂に見える尖塔の上に、
めづらしく朗かな一日の
親みある、また莊嚴な顔をして、
そのあたりの空間に金をまきちらしてゐる。
むかふの東の空の淡桃色の雲。
またその下のはるかなはなだ色。
見わたすかぎり天も地も、
ひろびろした秋の静けさ美しさに、
水のやうに満たされてゐる。
試合は刻々に熱してくる。
両軍の選手の表情には、

次第に決然としたものが加つてくる。
見物の注意は、
飛びちがふ球の方向と
それに應ずる選手の稲妻のやうな動作の上に
熱を帯びて集中する。
サーブの手堅い打ちこみ。
両脚を開いてあらゆる難球を受止めようと
身がまへる
前衛の決意と確信とのまなざし。
打てば直ちに突進し、
またはすばやく後退する飛鳥のやうなその運動。
球の性質を咄嗟に見て取るその俊敏な頭腦と眼と、
腰をひねつて横に拂ひ、

〔Setya〕

まなざし

颯爽
白熱

飛びあがつて叩きこみ、
 また片足を引き、両脚を山形にふんばつて、
 飛來する球をすくひ打ちするその颯爽たる姿勢。
 實にそのあらゆる瞬間が白熱であり、
 尖銳に尖銳した注意が、
 修練の妙味と相俟つて、
 看るものを驚歎せしめる技倆をあらはす。
 しかも當の選手は、
 眼中たゞ一個の輝く球があるのみだ。
 むしろ球の速度、それに與へられた廻轉の方向、
 そのバウンドの方向の意識があるのみだ。
 彼等自身球となり、^(一)ラケットとなり、
 またラインとなつて、ちよつとの間隙もない。

Bound.
Racket.

氣魄
擗猛

その緊張しきつた體軀と神經の共同動作の美しさ。
 彼等四人の打ちこみ打ちかへす氣魄の猛烈さ。
 そして輕快な球、擗猛な球。
 笑つてゐるやうな球、怒つたやうに見える球。
 またばらばらに碎けて飛散るかと思はれるラケットの激
 烈な打撃。
 またバイオリンの^(一)頸首のやうなその微妙な一あて。
 一切の技術と頭腦と運動とがそこに現出するものは、
 悉く一個の白熱した力である。
 この氣魄を讚美する。
 この白熱を讚美する。
 これは單に遊戯でありながら、
 ここに捲きおこされたものは遊戯ではない。

Violin.
Staccato.

眞劍そのものである。
 あゝ眞劍を讚美する。
 男子の眞劍を讚美する。
 勝負の如何ではない。
 問題は眞劍であることだ。
 人間のあらゆる生活に於て、
 藝術のあらゆる製作に於て、
 この眞劍さの現れる時、
 それは人を動かす力の美となり一つの勇となつて
 内迫せずには濟まないと思ふ。

二五 みやびの物語

一 秋の青柳

橘 成 季

(一)源有仁

花園左大臣家に始めて参りたりける侍の、名簿のはしがきに、能
 は歌よみ。」と書きたりけり。おとど秋の初に南殿に出でて、はたおりの
 鳴くを愛しておはしましけるに、暮れければ、下格子（ひがし）に人参れ。」と
 仰せられけるに、藏人五位たがひて、人も候はず。」と申して、この侍参
 りたるに、「汝は歌よみな。」とありければ、畏まりて、御格子おろしさし
 て候ふに、「このはたおりをば聞くや。一首つかうまつれ。」と仰せられ
 ければ、「青柳の。」と初の句を申し出したるを、さぶらひける女房たち、
 をりに合はずと思ひたりげにて、笑ひ出したりければ、ものを聞き
 はてずして笑ふやうやある。」と仰せられて、疾くつかうまつれ。」とあ
 りければ、

青柳のみどりの絲をくりおきて

なつへて秋ははたおりぞ鳴く

と詠みたりければ、おとど感じ給ひて、萩おりたる御直垂おし出し

(一)宇多天皇の時
の年號。
(二)祖友則。

て、賜はせけり。

寛平の歌合に、初雁を友則、

はる霞かすみていにし雁がねは

今ぞなくなる秋霧のうへに

と詠める。左方にてありけるに、五文字を詠じたりける時、右方の人
こゑこゑに笑ひけり。さて次の句に、かすみていにし。といひけるに
こそ、音もせずなりにけれ、同じことにや。

——古今著聞集——

二 王子猷

昔、王子猷、山陰といふ所に住みけり。世の中の渡らひにほだされ
ずして、たゞ春の花、秋の月にのみ心を澄ましつゝ、多くの年月を送
りけり。事に觸れて情深き人なりければ、かき曇り降る雪はじめて
晴れ、月の光清く凄じき夜、一人起きゐて、慰め難くや覺えけん、高瀬
船に棹さしつゝ、心に任せて戴安道を尋ね行くに、道のほど遙かに

(三)支那管の人。
名は徽子。
ほださる

高瀬船

て、夜も明け月も傾きぬるを、本意ならずや思ひけん、かくともいは
で、門のもとより立歸りけるを、いかにと問ふ人ありければ、

もろともに月見んとこそ思ひつれ

かならず人に逢はんものかは

とばかりいひて、遂に歸りぬ。心の好きたるほどは、これにて思ひ知
るべし。戴安道は剡縣といふ所に住みけり。この人の年頃の友なり。
同じさまに心を澄ましたる人にてなんはべりける。——唐物語——

三 三船の才

一年入道殿の大井川の逍遙させさせ給ひしに、作文の船、管絃の船
和歌の船と分たせ給ひて、その道にたへたる人々を乗せさせ給ひ
しに、この大納言殿の参り給へるを、入道殿、かの大納言いづれの船
にか乗らるべき。と宣はすれば、和歌の船に乗りはべらん。と宣ひて、
詠み給へるぞかし。

(一)藤原道長。
(二)京都の西嵐山
の下を流れる。
上流を保津川
下流を桂川と
いふ。
(三)権大納言藤原
公任。

を、ら山あらしの風の寒ければ

紅葉のにしききぬ人ぞなき

申しうく

申しうけ給へるかひありて、あそばしたりな。御みづからも宣ふな



三船の御遊 (花田義方筆)

るは、作文の船
にぞ乗るべか
りける。さてか
ばかりの詩を
作りたらし
かば、名のあが
らんことも勝

りなまし。口惜しかりけるわざかな。さても殿の、いづれにとか思ふ
と宣はせしになん、われながら心驕せられし。」と宣ふなる。ひと事の
優るゝだにあるに、かくいづれの道にもぬけいで給ひけんは、古も

はべらぬことなり。

—大鏡—

二六 水の音

相馬御風

「この間海へ汐水を汲みに行きましたをりに、妙な経験を一つ得
ました。それは、私が波間に立つて、自分の持つてゐた手桶で水を
汲上げました刹那、その手桶の中の水の、ちやびり、ちやびりと音
を立てたのが、ひどく私にもおもしろく感じられたことでした。波
は可なり高かつたのです。そして私が水を汲まうとして波間に
立出た時には、私は寄せては返す波の騒がしい響の中に居つた
のでした。それなのにその騒がしい響の中から、私の耳に自分の
汲上げた手桶の中の水の揺合ひ打合ふ微かな音が、はつきり聞
えたのです。私は驚かずにゐられませんでした。そして、なるほど
ここにも波が打つてゐる。ここにも波の音がある。そんなことを

芭蕉

枯枝三鳥の止り
秋のくれ

名月や池をめぐりて

夜もすがら

如實
感得す

あふ身を存せし
世もなき

日の光

よく思ひかた
手存花咲く

垣根のな

わがさやも
なごみの

雨の音

も、今更のやうに深い興味を以て考へずにはゐられなかつたのです……。

この頃こんな話をした人があつた。私もなるほどそれはおもしろい経験だつたに違ひないと思つた。大海の水も、手桶に汲上げた水も、同じく水である。大海の波も、手桶の中の動揺も、同じく波である。さうしたことを想像したり、抽象したりして考へることは、私たちにもできる。しかし、さうした自然の現象を如實に自己全體に感得する機會は、容易に得られない。私がその人の経験を貴く思つたのは、その故であつた。殊に大海の波の騒がしい音響の中に立つて、自己の汲上げた小さい手桶の中の水の打合ふ微かな音を聞き得た瞬間のその人の心持は、私にはたまらなく羨ましい氣がしたのであつた。

古池や蛙とびこむ水の音

心境

幽玄

芭蕉のこの句の意味や、この句を詠んだをりの芭蕉の心境について、古來實にさまざまな解釋が試みられてある。しかもその多くは、この一句の意味を幽玄化しようとして、却つてこの句そのものの眞價を傷つけたり、淺くしたり、低くしたりしてゐるに過ぎない。この句にこめられた芭蕉の心の貴さは、寧ろかうより外に、何とも表現することのできなかつたところに存する。これ以上、またこれ以外に、一語も、一句も加へることのできなかつた——そこにこそこの句のほんたうな尊さがある。

寂然とした古池に、小さい一個の生けるものが音を生んだ。天地をこめてゐた寂莫が、その小さい一個の生けるものの運動によつて、忽然として破られた。その経験をもとにして、恐らく芭蕉の心には、限りないさまざまな感想が湧起つたであらう。しかし、結局彼に

心的經驗

とつては、その瞬間全心全靈に感じた驚が、最初にして最後であつた。彼はその經驗から、更にいかに天地の眞理についての冥想に導かれたことであらう。しかも結局、何とかして自己のその貴い心的經驗を表現しようとする段になつて、彼はやはり

古池や蛙とびこむ水の音

と、それだけの現象を如實に歌ふより外に、如何ともすることができなかつた。

「結局これだけだ。これがすべてだ。これより外に何も無い。」

かう彼は自らも心に叫んだに違ひない。そして、そこにこそ彼がこの句によつて、正風の眼を開いた所以があるのだと思ふ。

——野を歩む者——

二七 實體實相

松 浦 一

すべてものの實體實相は、全體を解放したところにあり、區別を超越したところにありまして、それから生じてくる實體實相の威嚴は、想像するに難いことではありませんが、その例證に、私が非常におもしろく感じた和歌の話を擧げて見ませう。

(一)伊勢の歌人。彦根侯井伊直弼に擧用された。文久二年(一八六二年)歿、年四十八。

(一)長野義言の「歌の大武根」に、或尼が盜賊に縛られながら和歌を詠んだところが、盜賊はその和歌にひどく感動して、奪つたものまでも返して、逃げてしまつたといふ奥ゆかしい話を書いてあります。

(二)滋賀縣犬上郡彦根町。

近き頃彦根に、慈門といへる尼、若くて世を遁れ、里根といふかたはしなる所に庵を占めて住みけるに、一夜盜人ども忍び入りて、尼をからめおき、ものなど奪はんとせしに、尼からめられながら詠みける、

よし垣ももとは難波のあしなれば

こすもことわりよるのしらなみ

神性

この歌を聞き、盗人ども尼をゆるし、物皆返して出でいにけり。意は、世を遁れ來て棲める庵のよし垣も、元は難波の浦に生ひたる蘆と同じ類のものなれば、今宵しも白浪の越えて入りしは理なり。かゝれば身は遁れても、世を隔つる垣はなきぞと感じ諦めたるを、情深く哀にいひなしたるにて、これも詞には盗人すなといへるならねども、同じ世にふる人なれば、いかでか感じ實にもと思ふ心なからん。この白浪は盗人のことなり。

日本文學に歌の徳が靈妙な力を現すといふ話が澤山あり、またこれを仕組んだ作品が澤山あるのは、日本人が昔から文學に一種の神性を感じ、そこに靈的な意味を理解することが一般にできてゐたといふことを示すものでありますから、この點だけでも、文學的に日本人は世界に誇ることができるのであります。それは文學といつても歌にとゞまるではないかと、いふ人があるかも知れま

眞髓

朴直

遜色

せんが、詩歌は文學の眞髓であります。歌についてこれだけの感得が自由にできれば十分であります。この點については、明治に始つた新日本の日本人は、却つて舊日本の日本人よりも、文學的に墮落して居りはしないかと思はれます。理窟をいふことを知らずして、率直にももの精神に觸れることのできたのが、舊日本の特色であります。理窟をいふことは巧になつたけれども、朴直と深切と、隨つてももの精神を眞に感じ、全心を傾注して事物を尊敬し崇拜することができなくなつたのが、新日本の遜色であります。

さてこの歌の貴いところは、限界が固まりついてゐる浮世の垣を、そのままに僧庵の周圍に取周らしたものであるから、俗縁を斷つたと思つてゐた身でも、やはり俗縁に繋がれてゐた。俗縁に繋がれてゐるものが、俗縁で盜賊にはいられても、いたし方ない次第である。と悟つたその一つの悟にあります。この悟にはいつてしまへ

心の垣を撤す

ば、垣を結んだのがすでに誤である。尼は縛られても盗人を怨まない。また盗人に盗みをするなと訓戒もしない。その怨まず、戒めず、自己の心の垣を撤して區別もなく、區劃もなく、一切を解放して分つこともできず、集めることもできぬ自分といふものの實體をなげだしたところに、賊を威壓し、私たちを威壓する力が生じて來たのであります。かういふ例は、たゞ歌の徳といふばかりではありませう。んから、高德な上人の間には、これに類した話は澤山にありませうが、要するに、一切のものが、この實體實相と威嚴との境涯まで行かなければ、未熟でなければ虚偽であると思ふのであります。

——文學の本質——

二八 狐塚

昔このあたりのものでござる。某山田を數多もつてござる。當年

氣の毒

は殊の外ようできてござる。さりながらこの頃は、鹿、猿、貉が出て田を荒します。太郎冠者を呼出し、山田の番にやらうと存ずる。やいやい、太郎冠者あるか。太はあ、御前に居ります。昔、汝を呼出すこと別の事でない。當年は身どもの山田が殊の外ようできた。それにつき、この頃は鹿、猿が田を荒すほどに、汝は今夜山田へいて、鳥獸も來たらば追うて番をせい。太、畏まつてござる。私一人でござるか。昔いや、後ほどは次郎冠者も見まひにやらうほどに、まづ行け。太、心得ました。昔、さりながらこの中は、狐塚きつこうの狐が出てばかすといふほどに、ばかされぬやうにして番をせい。太、それはこはい事でござる。もはや参ります。昔、あす早々歸れ。太、はあ。さてもさても迷惑なことをいひつけられた。夜晝使はるゝといふは、氣の毒なことぢや。参るほどにこれぢや。まづこれにゐて番をいたさう。

昔、太郎冠者を山田へ番に遣してござる。定めて寂しうして居る

太儀

でござらう。次郎冠者を見まひに遣さうと存ずる。やいやい、次郎冠者あるか。次、これに居ります。主、汝は太儀ながら山田へいて、太郎冠者が伽をしてやれ。次、畏まつてござる。主、小筒もちと持つて行け。次、心得ました。これはさて迷惑なれども、参らずばなるまい。主命ぢや、是非に及ばぬ。これは暗うて、どこやら知れることでない。呼ばはつて見よう。ほうい、ほうい、太郎冠者やい。どこにゐるぞ。次、さればこそ狐が出た。あれは次郎冠者が聲ぢや。よう似せた。おのればかざる。ことではないぞ。まづ眉毛を濡さう。次、ほうい、ほうい。次、ほうい、ほうい。ここにゐるは。次、どこにゐるぞ。次、ここにゐるは。やあ次郎冠者か。次、なかなか。頼うだ人にいひつけられて、伽に來たは。次、ようこそ。おりやつたれ。さてもさてもようばけた。そのまゝの次郎冠者ぢや。捕へて縛つてやらう。やい次郎冠者。最前向ふの山から大きな鹿が出たを、身どもが追うたれば、こなたの山へくわらくわらと逃げた

は。次、それはでかした。次、どつこへ、やることではないぞ。次、これは何とするぞ。次、何とするとは狐め。ばかさるゝことではないぞ。次、おれは次郎冠者ぢや。次、何の次郎冠者。おのれ縛つて、この柱にくゝつて置いて。狐殿よい體なまの。おのれ今に皮を剥いでくれうぞ。

主、太郎冠者、次郎冠者を山田へ遣してござる。心許なうござる。見に参らうと存ずる。ほうい、ほうい、太郎冠者やい。次郎冠者やい。ほうい、ほうい。次、これはいかなこと。また狐が出をつた。あれは頼うだ人の聲ぢや。これも捕へてやらう。ほうい、ほうい。主、ほうい、ほうい。どこにゐるぞ。次、ここにゐます。主、やあ、ここにゐるか。寂しからうと思つて見まひに來た。次郎冠者を先へおこしたが。次、なかなか。あれにゐます。これはいかなこと。これもようばけた。そのまゝ、頼うだ人ぢや。縛つてくれう。がつきめ。おのれだまさるゝことではないぞ。主、これは何とするぞ。身どもぢや。次、おのれもようばけた。まづ縛つて、この

大木にくゝりつけて置いて、いたしやうがある。狐は松葉でふすべるといやるといふ。ふすべてやらう。さあさあ尾を出せ。鳴け鳴け。主、おのれ太郎冠者め。主をこのやうにして。罰當りめ。太、何を狐殿いはるゝ。さらば次郎冠者狐もふすべてやらう。さあさあ鳴け鳴け。こんこんといへ。次、これは何とする。太、あれやあれや、いやがるは、いやがるは。おのれ二匹ながら鎌を取つて来て、皮を剥いでくれうぞ。鎌を取つてくれ。ようばかさうと思つたなあ。たゞ今殺してくれうぞ。鎌を取つてくるぞ。主、さてもさても氣の毒な奴ぢや。やあ、それに見ゆるは次郎冠者か。次、さやうでござる。此方は頼うだ御方か。主、なかなか。汝も縛りをつたか。次、いかにも縛られました。主、何と鎌を取つてくる、殺さうといひをつたが、何とそちが繩はほどかれぬか。次、されば、どうやら繩が解けさうにござる。解けますぞ。解けますぞ。さあ解きました。どれどれ、此方も解きませう。さてもさても憎い奴でござる。

何としたものでござらう。主、いやいや、この體ではそばへ寄るまいほどに、もとのやうにしてゐて、これへ來たらば捕へて、あいつをゆ



狐 塚 (載所記言狂)

りにあげう。次、一段とようござらう。主、さあ、これへ寄つても、もとのやうにしてゐよ。次、心得ました。

太、狐めは二匹ながら居るか知らぬ。この鎌で殺してくれう。さあ今打殺すぞ。主、それや次郎冠者。次、心得ました。主、おのれ憎い奴の。次郎冠者足を持て。次、心得ました。主、さあ、ゆりにあげ。ゆりにあげ。太、これは何と狐どもするぞ。主、狐とはまだ。おのれめは憎い奴の。縛り居つたがよいか。これがよいか。これがよいか。太、さては頼うだ。人、次郎冠者か。ゆるさせられ。まつびら御ゆるされ。まつびら御ゆる

るされ。二人どこへ失せる。やるまいぞ。やるまいぞ。

二九 日蓮上人

高山林次郎

この世の中で眞に偉大な事業といふのは、何も戦争に勝つたり、國を取つたりすることのみではない。少年の心には、とかく頼朝や太閤のやうに、天下を取つたり、外國を征伐したりするのが、眞に英雄の事業の如くに思はれ、文藝や宗教の上の成功などは、さほどに尊ぶに足らぬことのやうに思はれるであらうが、これは大いなる誤である。敵を征服し城を屠ることも難事ではあるが、人の精神を征服し、千百年の後世までもその勢力を有することは、人間の事業としては更に大きく、また更に尊むべきことではあるまいか。アレキサンダー大帝の遺業も、ローマ帝國の覇權も、その時々、榮落に過ぎずして、今日に於ては何の跡形もないが、アリストートルの學

吾人は領ヲ現代ニ超越セテ、ルベカラス

標牛

霸權
Aristotles
有名なギリシヤの哲學者。
(西曆前三八四年—三二二年)

Jesus Christ

(三)共に地名。

野心家

快哉を叫ぶ

Thomas Carlyle

イギリスの文學者、歴史家。
(西曆一七九五年—一八八一年)

William Shakespeare

イギリスの劇作家、世界的文豪。
(西曆一五六四年—一六一六年)

術や、キリストの教は、今日もなほ昔の如く、人の心を支配し感化してゐる。春秋戰國の王霸の争も、支那の歴史に空しい文字を留めたばかりであるが、その當時に陳蔡の野に飢ゑた孔子の教は、今もなほ東洋文明の根據となつてゐる。世に所謂英雄豪傑の事業は、壯快は壯快であるが、畢竟一時の野心家の野心を満足せしめる外に、多く後世に影響を與へるものではない。これを喩へるならば、ちやうど仕掛花火の、一時人目を眩まして、覺えず快哉を叫ばれるが、間もなく消え去つてもとの暗黒に立ちかへるやうなものだ。これを文藝や宗教の勢力の、深大で且つ永久なのに比べれば、事業の價値いづれが大であるか、自ら明らかであらうと思ふ。されば英國の哲人カーライルは、イギリスが一人のシェークスピアを有することは、印度帝國を有するよりも尊いといつた。

また人物の上から見ても、眞に大なる人物とは、その思想が高尙

情操

で品性尊く、且つ意力情操の絶大純潔な人を謂ふのである。その所謂英雄豪傑と呼ばれる人の中には、その表面の仕事こそ人並以上に大きい、その品性のこれに伴なつて高潔なのは極めて乏しい。つまり彼等の多くは、境遇の幸であつたが爲におのれ眞にこれに當るべき才器品性がなくして、偶然に大事を成遂げたのである。例へば、高山の上に吹上げられた種子がそこに生長して、亭々として天際に聳えるやうなものである。若し揮一貫の赤裸にして突出したならば、東家西家の權兵衛、八兵衛同様の人間でないものが幾人あるであらうか。一言すれば、彼等の多くは、所謂時勢の寵兒であつたからである。

日蓮上人はその人物に於ても、その事業に於ても、眞に偉大と稱せらるべき人であつた。

まづその事蹟から考へて見ても、安房の一漁師の子に生まれ、幼

東家西家

時勢の寵兒

(一)千葉縣(安房國)安房郡天津町の北山に清澄寺がある。

罵詈す

大覇府 (二)日蓮の四個の格言。念佛無間、禪天魔眞、言亡國、律國賊。



より出家して清澄山(一)に上り、後、叡山に學び、十二年の遊學の後、當時

に行はれた佛教諸宗門の、いづれも教祖なる釋迦の眞意に違へるものなる

清 ことを悟り、その故山に歸つて始めて

法華の新宗門を開いたが、聞くもの皆

狂として取合はず、却つて在來の宗門

を罵詈(二)したのを怒つて、彼を殺さうと

したものをすらあつた。日蓮は遁れて鎌

倉に至り、淨土や禪宗の全盛を極めつ

つあるこの大覇府の大道に立つて、念(三)

佛者は無間地獄に墮つべし。禪は天魔

の業ぞ。と大呼したので、執權北條氏の

怒に觸れて、一度は伊豆に流され、二度は佐渡に流され、その間、暴民

(一)神奈川縣(相模國)鎌倉郡川口村龍口寺の地かといふ。刀杖瓦石の災難

の爲に庵室を焼かれたり、龍口(一)に引かれて首斬られようとしたり、敵人に要撃されて命を落さうとしたり、その他、刀杖瓦石の災難その數を知らず、前後凡そ二十二年の間、席煖るに違なく、生疵の身に絶える間は殆どなかつたとのことである。

生死の間に出入す

日蓮の受けた迫害は、實に慘酷極つたものであつた。そしてその時間も一年ならず、二年ならず、三五年乃至十年ならず、實に二十二年の長い間であつた。彼は長い長い二十二年の間、絶えず自己の信じた眞理を飽くまで宣傳し、生死の間に出入して、泰然として動かなかつた。常に「この臭き軀を法華經に捧ぐるは、砂を黄金に代へ、糞を米に換ふるなり。」といひ、たとひ日本國の位を以て誘ふとも、父母の頸を斬らんと脅すとも、我は決してこの眞理をば棄てじ。その外の大難は風の前の塵なるべし。」と宣言して、天下何恐るゝところなく、憚るところなく、聲の根の枯れない限り、筆の毛の續く限り、正々

呼號す
(一)淨土宗の開祖源空のこと。建曆二年(一一八二年)寂年七十。
(二)眞宗の開祖で本願寺開基。弘長二年(一一九二年)寂年九十。
朝家權門 介然孤立 法鼓

堂々と天下に呼號した。法然(一)や親鸞(二)のやうに、朝家權門の知己があるのではなく、天上天下介然孤立の身を以て、滿天下の僧侶を敵として、折伏の法鼓を鳴らし、



法時の執權たる北條氏を華逆賊と呼ばはり、僅かの經小島の主と卑しんだその態度の雄々しさ、男らしさは、實に我が邦の歴史に類例のないことであつた。

古人の語に、「二義を執つて十年を踰ゆるものは必ず眞面目なり。」といふことがある。日蓮は二十二年の長い長い月日の間、常に生死の間に出入しながら、その眞理と信奉せる法華經を説いた。これは

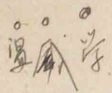
どの眞面目がまたと世にあるであらうか。されば天も人も次第にこの至誠の聲に靡いて、その教は漸く都鄙に擴り、淨土、禪宗の僧侶どももおひおひと改宗して、念佛の代りに唱題の響がだんだんと高くなつた。北條より足利の時代になつてからは、この宗門の勢は益々盛大となり、戰國時代にあつては、天下の寺院のうちで、法華その半ばを占めたとのこと。今日では眞宗の全盛に壓倒されたが、それでもなほ日本國の大宗門たるを失はぬ。これ皆日蓮の遺業の餘澤である。

それで日蓮の人物はどうであるかといふと、決して世人の多く信ずるやうな強情我慢一方の人ではない。七大寺の寺塔を焼拂ひて、彼等の頸を由比ヶ濱に斬らずば、日本國必ず亡ぶべし。など痛言したあたりは、實に辛辣激越の極みではあるが、その裏面に温潤玉の如き愛情が、春の泉のやうに溢れて居つた。夫婦の愛情に對して

痛言す

辛辣激越

(一)身延山。甲府市の西南九里。高さ一一四八米。



も、常に深厚な同情を寄せ、孝順の情に至つては、實に後人を感動せしめるに足る美蹟を遺した。即ち六十近い老境に至りながら、なほ父母を懷慕するの情に堪へず、身延(一)の山に引籠つてからも、毎日五十餘町もある險山を攀登つて、遙かに生國房州の空を拜んだといふことは、實に孝行の鑑といふべきではないか。これが一月、二月のことではない、雨の日も、雪の日も、九年の長い間、一日も缺かさなかつたといふに至つては、眞に驚嘆の外はないではないか。かういふ慈悲愛情の話が、上人の生涯には外にも甚だ多い。世人が折伏の側の上人のみを見て、單に強情我慢の一狂僧と思ふのは、全く上人の人物を知らぬことを自白するに等しい。これを要するに、上人は知識に於ては、當時のいかなる碩學にも匹敵し得べき深大な素養を有し、またその威力に於ては、生死を顧ずしてその信念所志を貫徹するの大勇猛心を有し、またその感情に於ては、温潤閑雅、所謂大丈

俠骨
底の

夫の俠骨は婦女子の柔腸を妨げざる底の人情をもつたのである。

——橋牛全集——

霧の身延 (自修文) 田山花袋

(一)身延山の西
跪坐
ちやんとすわ
ること。
激湍
岩に突當つて
流れる早瀬。
(二)日蓮宗の總本
山。山梨縣南
巨摩郡。身延
山の南西に在
る。弘安四年
(一七九四年)
創立。日蓮上
人九年間。幽棲
の地で、その
骨が埋めてあ

あそこが身延の奥の院のある所だといふ山には、赤く薙いだ所があつて、その上にはおもしろいひよろ松が、列をなして並んで生えてゐる。私はけふここまで行かうと思つてゐる。都合がよかつたら、そこから七面山の奥まで行かうとも考へてゐる。私は舟の中に跪坐して、その山の近づいてくるのを眺めた。波木井に來て私は舟を乗捨てた。しかし、そこは寂しい村で、午飯を食ふやうな家もない。し方がないから、私は空腹を抱へながら、身延の町へと志した。波木井川に沿つて上つて行く路は、ちよつと鮮かな明るい感じがする。激湍のさまもよければ、溪の屈曲してゐる形も見事で、釣橋などが架つてゐる。やがて久遠寺の最初の山門が大きく前に現れて來た。多いといふほどでもないが、杉の太木が所々にあつて、それが到る所に涼しい

い蔭を作つてゐる。橋を渡つて、石ころのごろごろする歩きにくい路を五六町行くと、やがて寂しい身延の町が見えだした。

有名な寺のある町といふよりも、山の町といふ感じを私は一番先に受けた。耳の立つた和犬、指物師の店、乾物屋、汚い旅館、暢氣さうに子供をおぶつて立つてゐるおかみさん、何年も挽いたことのないうやうな壊れた車、さういふものが歩いて行く私の眼に映つた。それに町はS字形に折曲つてゐて、それを過ぎると、上に高く杉の森と山の翠微とを背景にして、久遠寺の山門が高く町に臨んでゐる。

旅館に休んで、大急ぎで午飯を済ました。床の間には、小笠原子爵の「ありがたや御法の風に拂はれて、心にかゝる浮雲もなし。」といふ歌の軸が掛つてゐる。日蓮の修行地——さういふ感じがどことなく



翠微
山氣で青く霞
む所。

(一)小笠原長生。
海軍中將。

霧の身延 (自修文)

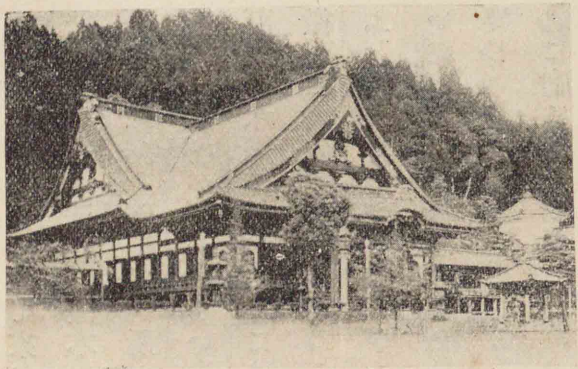
私の胸に迫つて來た。

日蓮は私はさう好きでない。私は佛教に對しては、もつともつと古い所にあ
こがれてゐる。社會を相手にした僧よりも、自己の苦悶と戦つた僧たちの方が
より多く私の胸に觸れる。しかし、日蓮が晩年この山に來て、寂しく一人苦行
を積んだことは、私の心を動かさずには置かなかつた。

私は急いで出かける支度をした。奥の院まで五十町、そこまでは是非行かな
ければならない。かう思つて私は出かけた。もう時計は四時に近い。それに宿
を出る時には、今まで晴れてゐた空が曇つて、凄じい黒い雲が、一面に蓋をす
るやうに蔽ひかゝつた。奥の院のあるといふ山の上には、特に雲が凄じく暗く
かゝつてゐる。「お山は雨だな。こんなことを誰かがいつた。

長い石段を喘ぎ喘ぎ登つて、本堂から奥の院の方へ行く路に入つた時には、
雨はもうほつりほつり落ちて來て、林の中は俄に暗くなつて行つた。杉、梅、
落葉松、さういふ木の林の中を、路は縫ふやうにして、次第次第に上つて行く。
こちらの山の背から向ふの背に行つた時には、深い谷が一瞬の下に開けた。そ

(一)久遠寺の末寺。



れは早川の谷と富士川との相合する所である。霧と雲とは附近の山々から湧く
やうに渦巻き上つて、見るが中にさうした光景はその中に包まれて行つた。

久遠寺本堂

身延の山、奥の院、それは誰でも行く所であ
る。女、子供でも行く所である。しかし、私は
それを深い霧と凄じい風の中に登つた。私は長
い間誰一人にも逢はなかつた。三光院に着いた
頃には、雨はどしやぶりになつて、霧で一間先
も見えぬくらゐであつた。いろは四十八曲を通
つた時の凄じさは、今でも私の眼の前にある。
登つて行くに連れて風は強くなり、雨は烈しく
なり、霧は深くなつた。或岩角では颱風に遭つ
て、私の蝙蝠傘は危く松茸のやうになつてしま
はうとした。さすがに日蓮のゐた山だといふやうな氣がした。荒山、實際荒山
である。社會と闘つた日蓮は、更にこの大自然とも闘はうとしたのである。私

はこんなことを思ひながら歩いた。一步は一步より峻しく、岩角から岩角へと路はついて行つた。時計を見るともう五時半である。五十町、それくらゐの路はわけはないと思つて來た私も、いつの間にか思はぬ時間の經つてゐることに驚いた。三十五町の標木は、もう少し前に過ぎて來た。

雨は雲霧を破つて、所々縞のやうに見える。山の嶺の樹木は淒しく鳴響いて、天地の神秘が何か淒しいものを私の前に見せるかと思はれる。一町、二町、五町。お水屋に行つた時には、もう日はすつかり暮れて、ほの明るい薄暮の光が、微かに霧の中に残つてゐるばかりであつた。やがて四十五町の標木を過ぎた頃、ふと私は耳を欬てた。「ドンドコ、ドンドコ——」。お題目の音である。それを聞いた時の崇高な感じを、私は今でも忘れることができない。深い雲霧の中に、淒しい暴風雨の中に、こんな山の上にさうした勤行をしてゐる人たちのことが、急に胸に迫つて來た。

平日なら何でもないであらうが、深い霧と雲との中では、堂も杉も山門もすべて他界の光景のやうに私には思はれた。寂しい庫裡の中にある尼、圍爐裏の

勤行
おつとめ。

他界
ほかの世界。

(一) マーテルリン
クのこと。ペ
ルギーの神祕
劇作家。(西
曆一八六二年
) 思親閣。また
思堂といふ。
日蓮がここか
ら遙かに生地
の房州小湊を
拜して両親を
思慕した跡と
傳へる。
(二) 歌人。建久二
年(一八五一
年)歿。年五十
三。
(三) 京都のこと。
當時都は遷さ
れて攝津の福
原にあつた。
(四) 平清盛。
(五) 攝津にあつた
名所。武庫郡
魚崎から深江
邊の濱をいつ
たらしい。
(六) 今の御影附近
の松をいふ。
(七) 武庫郡布引山
にある。
(八) 在原業平。右

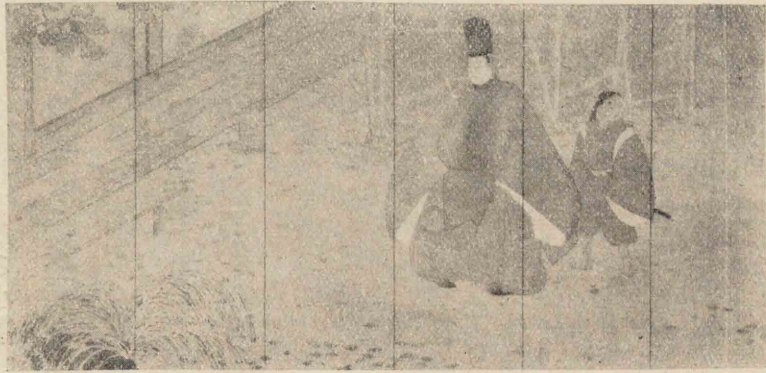
火を赤く燃してゐる小僧、暗い本尊の前にちらちらする蠟燭、それはすべてペ
ルギーの作家の舞臺面を私に思はせるに十分であつた。
私はやがて庫裡から奥の院の方へと行つた。そこには日蓮が始めて亡親を思
つたといふ遺蹟があつた。奥の大きな堂には開かぬ大きな扉があつて、お題目
の勤行の音はそこから四邊に響いて聞えた。霧は白くあたりを流れた。

—花袋全集—

三〇 舊都の月

後徳大寺の左大將實定は、舊都の月をこひわびて入道に暇を乞
ひ、都へ上り給ひけり。元より心すき給へる人にて、憂世の旅の思出
に、名所名所を訪ひ見てぞ上られける。千代に變らぬ翠は雀の松原、
みかげの松、雲居に曝す布引は、我が朝第二の瀧とかや、業平の中將
の、かの瀧見ての歸るさに、星か河邊の螢かと、浦路遙かに眺めけん、

近衛中將。元慶四年(一四〇年)歿。五
 (一)「はる、夜の星が河邊の
 釜かも、我が住む方のあまのたぐ火が」
 (新古今集)
 (二)攝津國(兵庫縣)川邊郡猪名川の河口。
 (三)同郡稻野の舊名。今大字に昆陽といふのがある。
 (四)見わたせば山もと霞む水無瀬川とゆふべは秋となに思ひけん増鏡後鳥羽上皇
 (四)攝津國(大阪府)三島郡島本村。山崎驛の雨を流れる小川。
 蓬が柚鳥の臥所

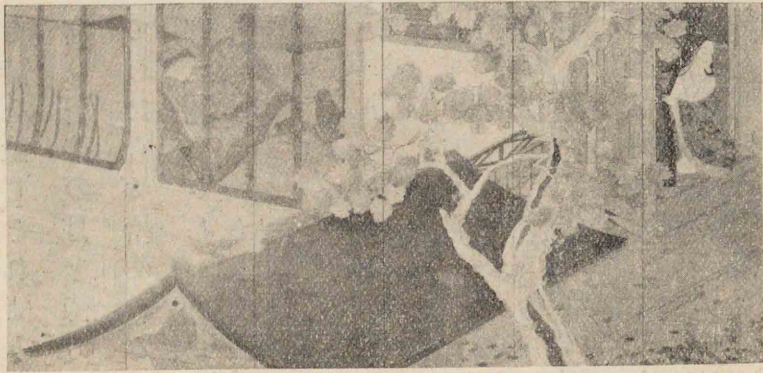


一のそ (筆陽南乾) 月の都 舊

いづこなるらんおぼつかなるな(一)の湊の曙に、霧たちこむる昆陽(二)の松かならず春にはあらねども、山本霞む水無瀬川(三)男山に澄む月は、石清水にや宿るらん。秋の山の紅葉の色、稻葉をわたる風の音、御身に浸みてぞ思しける。

さても都に入り給ひ、彼方此方を見給へば、空しき跡のみ多くして、たまたま残る門の内、行交ふ人もなければ、淺茅が原、蓬が柚と荒れはてて、鳥の臥所となりにけり。八月半ばのことなれば、まだ宵ながら出づる月、主なき宿に獨り住み、をり知り顔に鳴く雁の、聲さへつらくぞ聞し召

(一)近衛天皇の皇
 后。



二のそ (筆陽南乾) 月の都 舊

す。大將はいとど哀に堪へずして、大宮の御所に参り、待宵の小侍従といふ女房して、かくと申させ給ひければ、宮斜ならず御悦ありて、此方へ。と仰せけり。大將南庭をまはりて、彼方此方を見給ふにつけても、昔は百敷の大宮人にかしづかれて、明かし暮し給ひしに、今は幽かなる御所の御有様、軒に蔦茂り、庭に干草生ひかはず。こと問ふ人もなき宿に、萩吹く風も騒がしく、昔をこふる涙とや、露ぞ袂を濡しける。時しあればと思しくて、蟲の怨もたえだえに、草のとざしも枯れにけり。大將哀に心の澄みければ、庭上に立ちながら古

居待の月

あたりを拂ふ

き詩を詠じ、それより御前に参り給ひけり。八月十八日のことなり。宮は居待の月を待ちわびて、御簾半ば捲上げて、御琵琶をあそびし。てわたらせ給ひけるが、山立出づる月影を、なほや遅しと思しけん、御琵琶をさしおかせ給ひつゝ、御心を澄まさせ給ひけり。大將参り給ひければ、大宮は撥にて「それへ」と仰せけり。その御有様あたりを拂ひて見え給ふ。互に昔今の御物語あり。大將は福原の都の住憂きこと語り申して泣かれければ、宮は平の京の荒行くことを仰せ出して、共に御涙に咽せばせ給ひけり。かくて夜もいたく更けければ、后宮は御琵琶をかき寄せさせ給ひて、秋風樂を弾かせ給ふ。侍従は琴を弾きけり。大將は腰より笛を取出し、遙かにこれを吹き給ふ。その後故郷の荒行く悲しさを、今様に作りて歌ひ給ふ。

古きみやこを來て見れば、

淺茅が原とぞ成りにける。

月のひかりはくまなくて、

あき風のみぞ身にはしむ。

と三遍歌ひ給ひければ、宮を始めまゐらせて、御所中に候ひ給ひける。女房たちをりから哀に覺えて、皆袂をぞ絞りける。

—源平盛衰記—

訂改 帝國新讀本 卷五 終

大正十三年十一月三日印
大正十三年十一月六日發
大正十四年二月十二日訂正再版印刷
大正十四年二月十四日訂正再版發行
昭和二年五月廿二日改訂印刷
昭和二年五月廿五日改訂發行

(本讀新國帝訂改)

價 定	
自卷一 至卷四 各金四拾六錢	自卷五 至卷八 各金四拾壹錢
卷九 各金參拾四錢	

編者 芳賀矢一

發行者兼
印刷者 合資會社 富山房

代表者 合資會社 富山房社長 坂本嘉治馬

印刷所 東京市小石川區音羽町六丁目 富山房印刷工場



發行所

東京神田區通
神保町九番地

合資會社 富山房

電話神田 一一四一・一一四二・一一四三
振替口座東京 五〇一一番

宗中

第三卷第八學級

出店守



